千葉県匝瑳郡光町

小川台遺跡発掘調査報告

1987. 2

光町小川台遺跡調査会

千葉県匝瑳郡光町

小川台遺跡発掘調査報告

1987. 2

光町小川台遺跡調査会

序　　文

栗山川は下総と上総の国境を流れる小さな川であるが、流域は往古より先人の貴重な文化の足跡が遺されています。

このたび、土砂採取にともない調査が行なわれた小川台遺跡は、栗山川の支流を眼下に抱く下総台地で、昭和49年に調査された小川台古墳群に隣接し、私どもの祖先の生活を知るうえで、貴重な資料の宝庫とみられます。

故きを温ね新しきを知ることは、私たちへの教訓であり、文化遺産を保存伝承していくことは、私どもに課せられた責務ではありますが、開発と保護は、まだ幾多の問題が山積しているのが現状であります。

今回の調査では、遺跡を現状のまま保存し、破壊から守ることを原則として、最少限度内の調査にとどめ、結果を記録保存することにいたしました。

この報告書が郷土の理解と、古代の研究のために活用戴けることを切に望むものであります。

終りに、本調査に当りいろいろと御指導を賜りました県文化課、直接調査にあたられました調査員の方々、さらに土地所有者等々関係の皆様に心から敬意を表します。

昭和62年2月

光町小川台遺跡調査会

例　　言

1．本書は、匝瑳郡光町小川台における大木重機建設(有)による土砂採取事業に先立つ埋蔵文化財の調査報告である。

2．本調査は、小川台遺跡調査会が昭和61年9月19日から同年10月6日まで行なった。

3．調査は、千葉県教育庁文化課、及び光町公民館の指導により、小川町遺跡調査会のもとに、下記の組織によって行なわれた。

会　　長	深田隆明（光町公民館長）
委　　員	林　　正（文化財審議員）
	伊橋敏郎（文化財審議員）
	向後秋夫（光町公民館長代理）
事務局	市原成一（光町公民館社会教育課主事）
調査員	青木幸一（日本考古学研究所研究員、日本考古学協会会員）
調査補助員	大淵淳志（日本考古学研究所研究員）

4．調査整理作業は、調査団で行ない、図版作成は青木、大淵が行なった。執筆は、青木があたった。

5．遺構実測図中の水糸レベル上の数字は標高を表わし、遺物出土レベルは、床面に対して±0cmとし、文末に表示した。

6．本調査の遂行にあたっては、多くの方々にご指導、ご鞭撻を頂き、感謝申し上げる次第であります。

目　　次

序

例　　言

1．はじめに ……1

2．遺跡と周辺の環境 ……1

3．調査経過 ……3

4．検出した遺構・遺物 ……5

（1）住　居　址 ……5

（2）土　　壙 …… 22

（3）掘立柱建物址 …… 24

（4）溝状遺構及びピット群 …… 26

（5）遺構外より検出された遺物 …… 28

5．ま　と　め …… 29

挿 図 目 次

第 1 図 位 置 図 …… 2
第 2 図 遺構配置図 …… 4
第 3 図 第 1 号住居址実測図 …… 6
第 4 図 第 1 号住居址カマド実測図 …… 6
第 5 図 第 1 号住居址出土遺物(1) …… 6
第 6 図 第 1 号住居址出土遺物(2) …… 7
第 7 図 第 2 号住居址実測図 …… 8
第 8 図 第 2 号住居址出土遺物 …… 8
第 9 図 第 3 号住居址実測図 …… 10
第 10 図 第 3 号住居址カマド実測図 …… 10
第 11 図 第 3 号住居址出土遺物(1) …… 10
第 12 図 第 3 号住居址出土遺物(2) …… 11
第 13 図 第 4 号住居址実測図 …… 12
第 14 図 第 5 号住居址実測図 …… 14
第 15 図 第 5 号住居址出土遺物(1) …… 14
第 16 図 第 5 号住居址出土遺物(2) …… 15
第 17 図 第 6 号住居址実測図 …… 16
第 18 図 第 6 号住居址カマド実測図 …… 16
第 19 図 第 6 号住居址出土遺物 …… 16
第 20 図 第 7 号住居址実測図 …… 18
第 21 図 第 7 号住居址カマド実測図 …… 18
第 22 図 第 7 号住居址出土遺物 …… 18
第 23 図 第 8 号住居址実測図 …… 20
第 24 図 第 8 号住居址カマド実測図 …… 20
第 25 図 第 8 号住居址出土遺物(1) …… 20
第 26 図 第 8 号住居址出土遺物(2) …… 21
第 27 図 第 9 号住居址実測図 …… 22
第 28 図 第 1 号土壙実測図 …… 23
第 29 図 第 1 号土壙出土遺物 …… 23

第30図　第2号土壙実測図 …… 23
第31図　第1号掘立柱建物址実測図 …… 25
第32図　第1号掘立柱建物址出土遺物 …… 25
第33図　第2号掘立柱建物址実測図 …… 25
第34図　溝状遺構及びピット群 …… 27
第35図　溝状遺構出土遺物 …… 27
第36図　遺構外出土遺物 …… 28

写真目次

図版 1.　1．遺跡遠景　2．遺跡遠景
図版 2.　1．遺跡全景　2．遺跡中央部　3．遺跡東端部
図版 3.　1．第1号住居址　2．遺物出土状態　3．第1号住居址カマド
図版 4.　1．第2号住居址・第9号住居址　2．第3号住居址　3．遺構出土状態
図版 5.　1．第3号住居址カマド　2．第4号住居址
図版 6.　1．第5号住居址
図版 7.　1．第6号住居址　2．第6号住居址カマド　3．第7号住居址
図版 8.　1．第8号住居址　2．第8号住居址カマド
図版 9.　1．第1号掘立柱建物址　2．第2号掘立柱建物址　3．第1号土壙
図版10.　1．第2号土壙　2．溝状遺構とピット群
図版11.　1．各須恵器片　2．各墨書土器

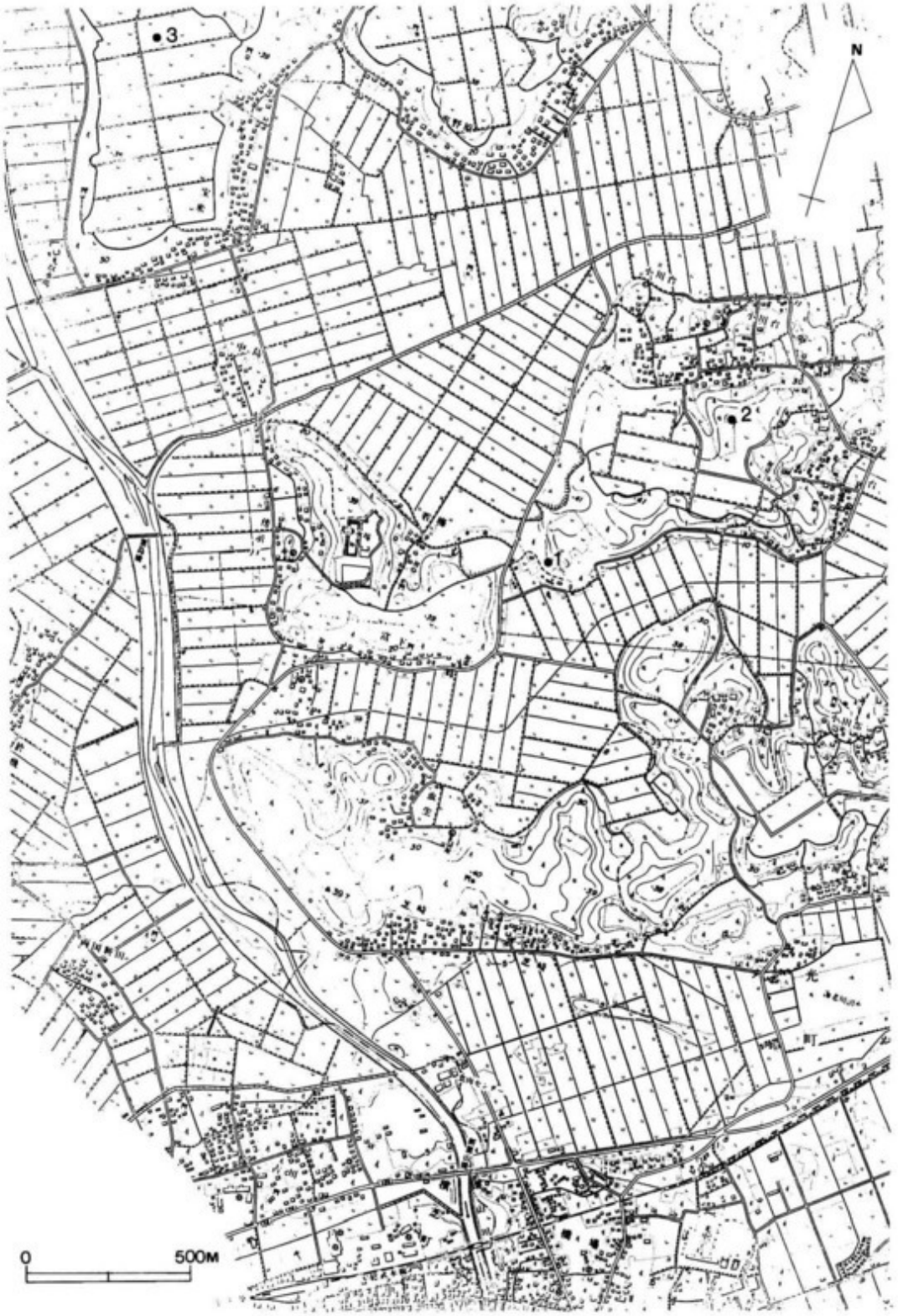
1. はじめに

今回調査した小川台遺跡は、奈良・平安期の集落址と考えられるが、狭小な面積であったため、その全体像を把握するまでには至らなかった。この遺跡が提出する資料は、奈良・平安期の資料として集積されるのであるが、汎日本的な見地からいえば非常にわずかな資料と言える。だが、当地域の奈良・平安期を考えるうえでは、重要な資料となり得る。昨今、発掘調査が急増し、広大な面積の調査及び貴重な資料検出がそれに比例して多くなっている。しかし、これらに対して、本遺跡のような狭小な面積で量的に少い資料のものがそれ以上に多いことも事実である。こういった「小」の遺跡・資料に対し、我々考古学に携わる者でさえも注意は薄らぐ傾向があり、地域の社会・文化を「大」の遺跡・資料のみを通して語ろうとすることが多々ある。「大」の遺跡・資料を通して、社会・文化を理解することは、ある面では妥当であり重要な要素でもあるが、決定的な要素にはなり得ないと言える。量的に多い「小」の遺跡・資料より量的に少い「大」の遺跡・資料を通して、地域の社会・文化を理解するのは疑問の残ることであり、「小」の遺跡・資料を通して、「大」の遺跡・資料の意義を認識し、そして地域の社会・文化を理解した方がより把握できるものと考えられる。

その意味でも、この小川台遺跡は膨大な奈良・平安期の資料に蓄積され、わずかな位置をなすにすぎないかもしれないが、その持つ意義は大きく、重要な役割りを担うものと確信している。

2. 遺跡と周辺の環境 (第1図)

本遺跡は、匝瑳郡光町小川台に位置する(1)。西側には栗山川が北西から南東に流れておりこれを利してかなりの低湿地が広がっている。この栗山川及びその支流から、かなりの独木舟が検出されており、縄文時代から生活の場であったと窺える。小川台遺跡(1)の周辺には、古墳及び中近世の城が数多く確認されている。(注1) その中でも調査・報告されたものに、小川台古墳群(2)と宝米古墳群(3)がある。(注2・注3) とくに小川台古墳群は、前方後円墳(5基)・方墳(1基)・円墳(12基)が確認され、遺物も多く検出された。本遺跡(1)のやや北側において昭和58年に八匝教育委員会が確認調査を行い、縄文土器・弥生土器・土師器(鬼高～国分)の散布がみられたとあり(注1)、その一端を示すのがこの小川台遺跡と思われる。本遺跡は、標高約30～35mに位置し、南側及び東側が削られ残存していなかった。また、北側に傾斜しておりその高低差は約4.5mを測り、遺構は調査区の東側に集中して検出された。(第2図)



第1図 位 置 図

内訳は、住居址9軒、土壙2基、掘立柱建物址2棟そして溝1本とピット群であり、いずれも奈良・平安期に属すると考えられる。遺構とくに住居址は、一段高い所に第1号～5号・9号住が存在し、それらより東端の下がった所に第6号～8号住が展開しており、集落は削られた南側及び東側に広がるものと思われる。調査区のほぼ中央付近に溝状遺構が存在するが、これは調査区外に沿って北西に伸びていることが確認できた。また、発掘できた一部の溝状遺構から廃棄したと思われる小破片の土器が多量に検出された。

本遺跡を中心に周辺には、小台地が散在しており、同時期の遺跡も数多く存在しているものと考えられる。これらの有機的な関連は、非常に興味深いところでもある。

注1）　千葉県文化財センター「千葉県埋蔵文化財分布地図(2)」昭和61年

注2）　杉山晋作「宝米六号墳石室調査報告」金鈴20号　昭和42年

注3）　滝口　宏他「下総小川台古墳群」八匝教育委員会・小川台古墳群調査団　昭和50年

3. 調査経過

本調査の前に、表土層を除去し遺構確認を行った。その結果、奈良・平安期の集落の一部と確認され、昭和61年9月19日より本調査を実施した。秋の長雨の時期であったが、さほど雨も降らず、無事同年10月6日に本調査が終了した。以下、調査日誌を記述していく。

9月19日(金)　発掘作業を開始。第1号住居址より発掘を行い、土層断面図まで終了した。

9月20日(土)　第1号住居址を完掘し、写真撮影を行う。第3号・4号住居址の作業を開始する。午後、雨のため中止とする。

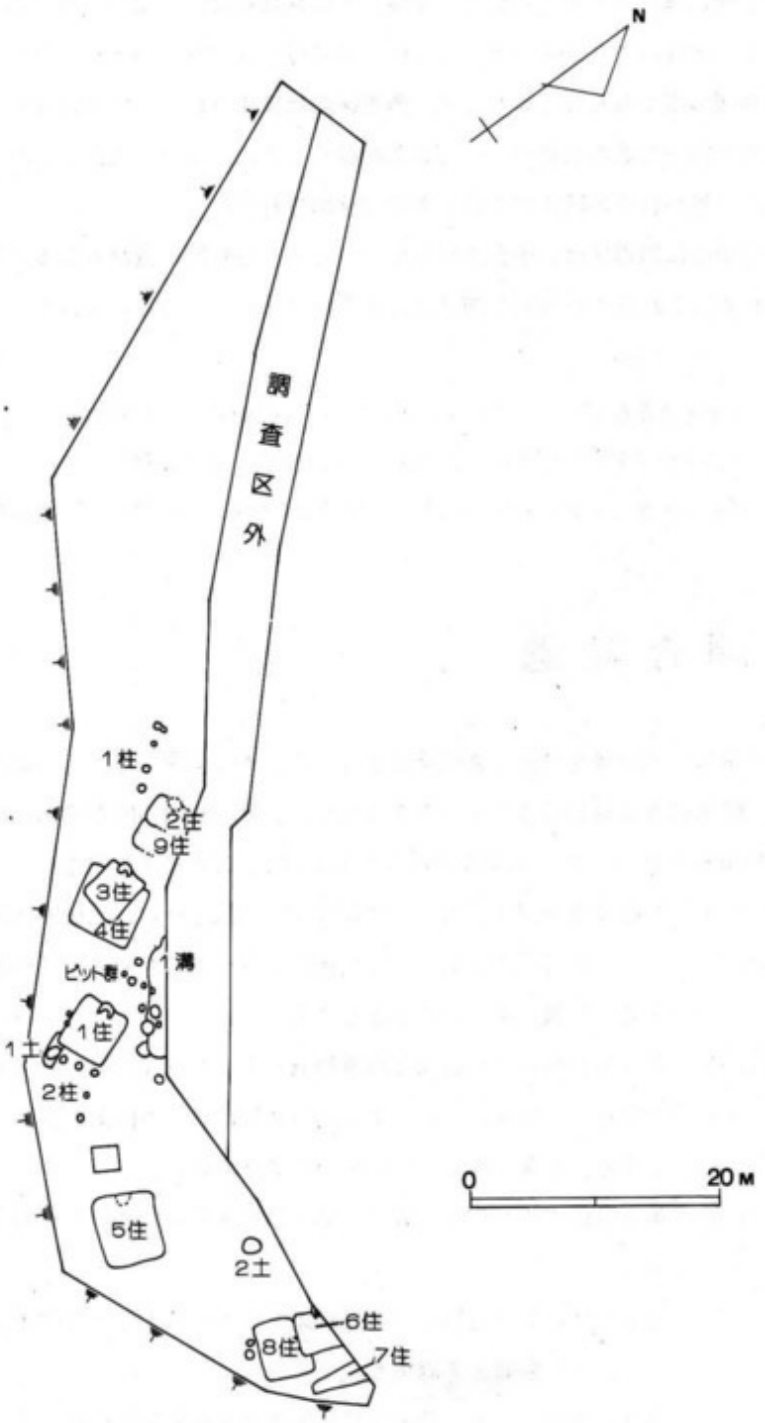
9月21日(日)　第1号住居址の平面図及び遺物取り上げを行う。第3号・4号住居址の作業を続行し、午後ほぼ終了する。第2号住居址の作業を開始し、写真撮影を終了する。午後、第5号住居址の作業を開始。

9月22日(月)　第5号住居址の作業を続行。第3号・4号住居址の土層断面及び柱穴の作業を行う。

9月23日(火)　第5号住居址を完掘し、土層断面をとる。第1号掘立柱建物址の発掘作業を行い、土層断面を実測する。

9月25日(木)　第5号住居址と第3号・4号住居址の写真撮影を行う。第2号掘立柱建物址及び第1号土壙の作業を行う。

9月26日(金)　第6号・7号住居址の作業を開始。第3号・4号住居址の平面図を実測し、第1号土壙の土層断面も行う。



第２図　遺構配置図

9月27日(土)　第6号・7号住居址の発掘作業を終了する。第8号住居址の作業を開始する。第1号土壙と第2号掘立柱建物址の写真撮影を行う。第1号土壙の実測を行う。

9月30日(火)　第6号・8号住居址の土層断面をとる。第6号・7号・8号住居址の写真撮影を行う。

10月 2 日(木)　第5号住居址の平面図を終了。溝状遺構とピット群の発掘作業を行う。第3号住居址の張り床を除去後、柱穴（第4号住居址に属す）が検出され、実測する。

10月 3 日(金)　第7号住居址の土層断面をとり、第6号・7号・8号住居址の実測を行う。第2号住居址及び第9号住居址の平面図作成、溝状遺構とピット群の写真撮影と土層断面を行う。

10月 4 日(土)　第1号・8号住居址のカマドを実測する。第1号・2号掘立柱建物址の平面図作成。

10月 5 日(日)　第3号・6号・7号住居址のカマドを実測する。溝状遺構及びピット群の平面図作成。一部深掘り（3×3×1m）を行ったが何も検出されなかった。

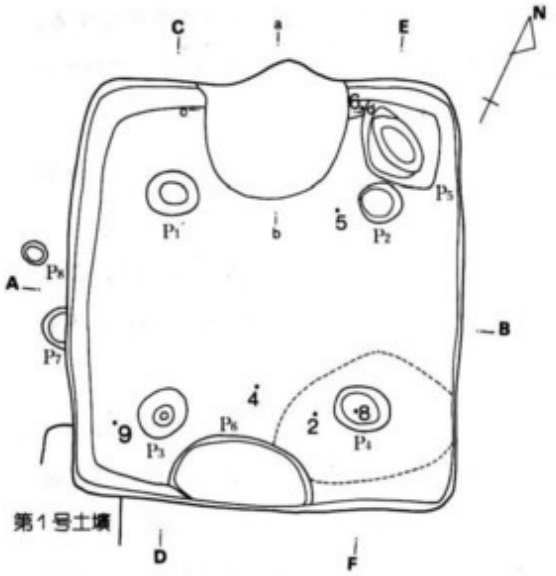
10月 6 日(月)　全測図を行う。本日をもって発掘調査を終了とする。

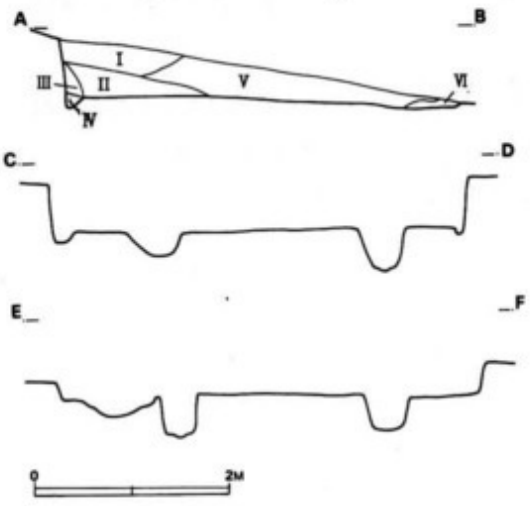
4．検出した遺構・遺物

（1） 住　居　址

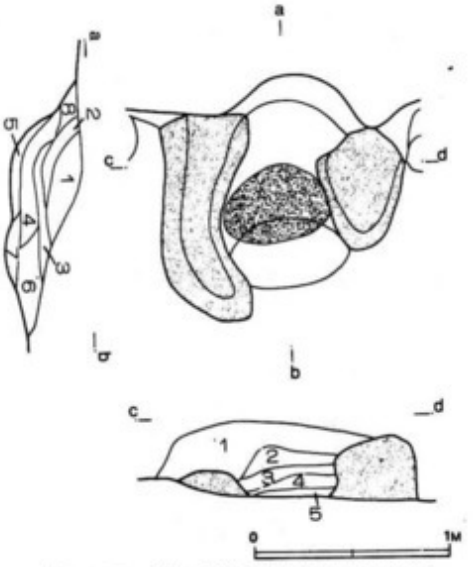
第1号住居址（第3図）

本住居址は、調査区中央よりやや東側に位置する。第1号土壙及び P_7 を切って存在する。**主軸方向**　北西。**平面形・規模**　ほぼ方形を呈し、規模は4.28×4.10mを測る。**壁高**　63cm。**床面状態**　ロームによる貼り床であり、中央付近が堅緻である。南東コーナー付近に焼土粒・粘土粒を含む暗褐色土（破線部分）が厚さ4～5cmで堆積、堅緻である。**周溝**　東側は検出されなかった。幅25cm、深さ10cm。**柱穴**　ほぼ各コーナー寄りに4本検出された。深さは、P_1・25cm、P_2・42cm、P_3・42cm、P_4・36cmを測る。P_6 は深さ10cmほどであるが、焼土粒・粘土粒を含む暗褐色土が堆積していた。底面は凹凸がある。P_7 と P_8 は本住居址に属するかは不明である。P_7・34cm、P_8・15cm。**カマド**　北壁の中央に位置する。縦軸130cm、横軸120cmの規模を有し、焚口部に深さ5cmの掘り込みがある。燃焼部は良く焼けていた。天井部・煙道部は崩落していた。（第4図）　**貯蔵穴**　北東コーナーに検出された（P_5）。一辺80cmの不整方形を呈し、有段状に掘り込まれ、底面は楕円形をなす。。深さ18cm。





第３図　第１号住居址実測図



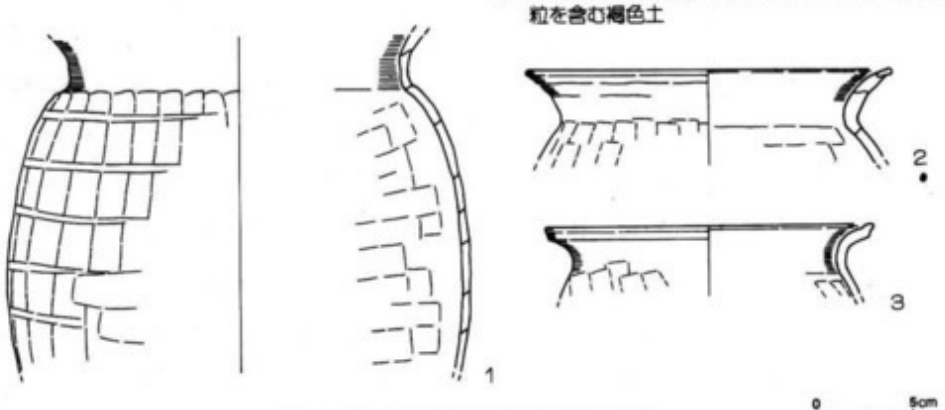
第４図　第１号住居址カマド実測図

住居址層序説明

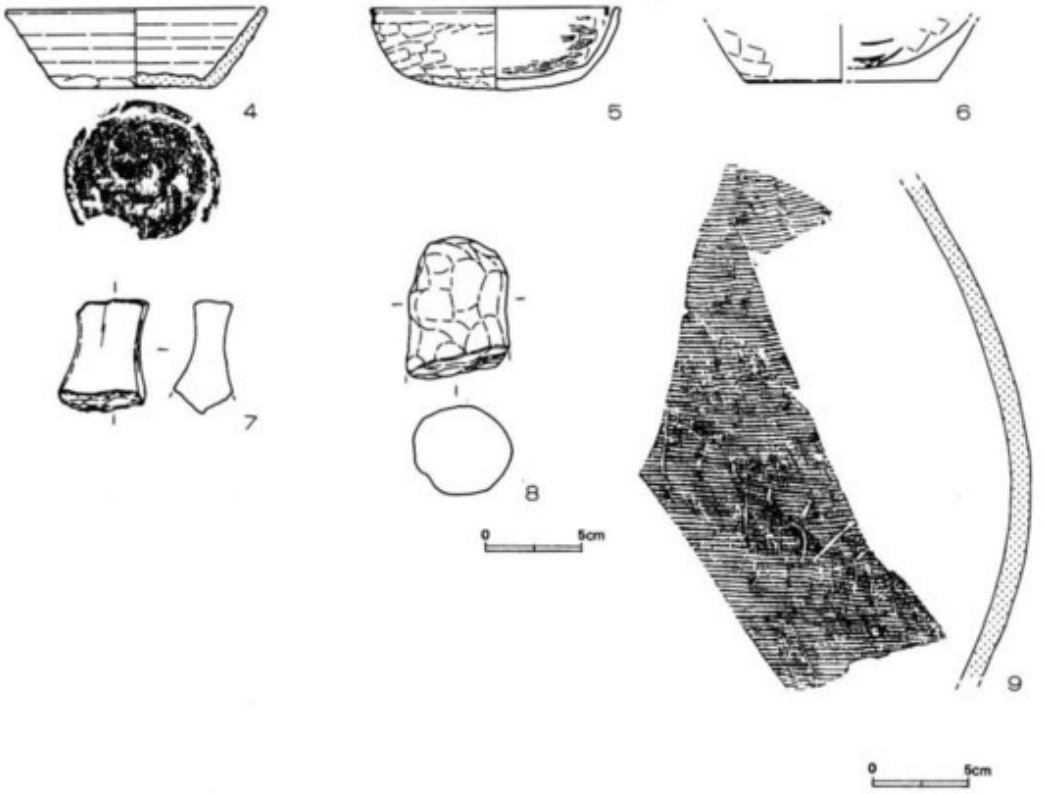
Ⅰ．多量のローム粒を含む暗黄褐色土
Ⅱ．少量のローム粒及び微量の焼土粒を含む黒褐色土
Ⅲ．微量のローム粒を含む黒色土
Ⅳ．微量のローム粒を含む暗褐色土
Ⅴ．少量のローム粒及びロームブロックを含み、微量の焼土粒を含む暗褐色土
Ⅵ．多量のローム粒及びロームブロックを含み、微量の焼土粒を含む暗褐色土

カマド層序説明

1．少量のローム粒及び少量の焼土粒を含む黒色土
2．多量の砂粒及び少量の焼土粒を含む粘土
3．少量の砂粒及び少量の焼土粒を含む黒褐色土
4．多量の砂粒及び多量の焼土粒を含む灰褐色土
5．少量の焼土粒及び少量の焼土ブロックを含み、少量の砂粒を含む暗褐色土
6．多量の焼土粒及び多量の焼土ブロックを含み、少量の砂粒を含む暗褐色土
7．少量の焼土粒及び少量の焼土ブロックを含み、少量の炭化粒を含む黒褐色土
8．多量の焼土粒及び多量の焼土ブロックを含み、少量の砂粒を含む褐色土



第５図　第１号住居址出土遺物(1)



第６図　第１号住居址出土遺物(2)

出土遺物（第５図・第６図）

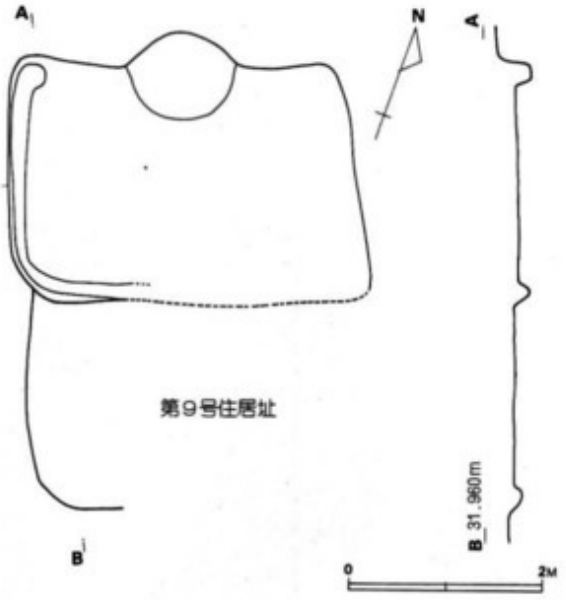
1．甕形土器（⅓）。口縁部欠損、頸部は内外面横なで。外面はヘラ削り後なで、内面はヘラなで。胎土は小砂粒多く、雲母片わずかに含み、焼成はやや堅緻。色調は内外面とも暗褐色を呈す。土師器。（カマド内覆土）

2．甕形土器（⅓）。土師器。口径28.8cm。口縁部は内外面横ナデ、頸部はなで、外面はヘラ削り、内面はヘラなで。胎土は、砂粒多く、焼成はやや堅緻、色調は内外面赤褐色。（＋10）

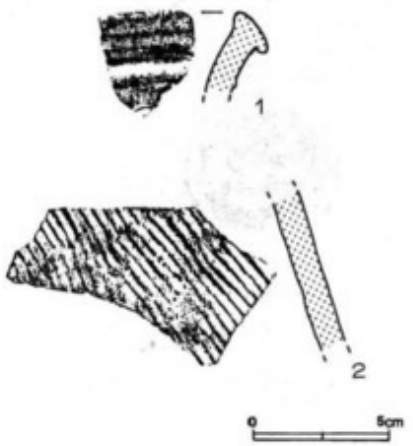
3．甕形土器（¼）。土師器。口径約17cm。口辺部は内外面とも横なで、外面はヘラ削り、内面はヘラなで。胎土は砂粒多く、赤色粒少し、焼成は堅緻。色調は内外褐色。（カマド内）

4．杯形土器（¾）。須恵器。口径13.7cm、底径約8cm、器高4.1cm。体部は内外面ロクロ成形、外面底辺部は手持ちヘラ削りで底部もヘラ削り。胎土は砂粒多く、金雲母含み、焼成はやや堅緻。色調は内外とも灰色を呈す。（＋６）

5．杯形土器。土師器。口径13cm、器高4.2cm。口縁部は内外面横なで、体部・底部はヘラ



第７図　第２号住居址実測図



第８図　第２号住居址出土遺物

削り後ヘラなで、内面はなで後ヘラ磨き（粗）。胎土は砂粒多く赤色粒子わずかに含み、焼成はやや堅緻。色調は内外面とも褐色。（±０）

６．甕形土器の底部（½）。土師器。底径10cm。内外面ヘラなでされ、内面にはヘラによる刻みがある。胎土は砂粒多く、焼成はやや軟弱。色調は外面暗褐色、内面橙褐色。（±０）

７．砥石。砂岩、表裏面とも擦れている。（覆土）

８．土製支脚。（±０）

９．甕形土器の胴部片。須恵器。タタキ目、外面にヘラ痕あり。内面は硯に使用か？　（±０）

第２号住居址（第７図）

本住居址は、調査区のほぼ中央に位置する。第９号住居址を切って存在する。東側は斜面になっているため、プランは不明確である。カマドもほとんど検出されず、焼土範囲を捉えたにすぎない。

主軸方向　北西。平面形・規模　南北2.50mを測り、隅丸長方形を呈すと思われる。壁高　20cm（西壁）。床面状態　やや軟弱である。周溝　西壁・南壁一部に検出。幅15cm。深さ13cm。

出土遺物（第８図）

１・２．甕形土器。須恵器。１は口縁部片、２の表面はタタキ目。（床直）

第3号住居址（第9図）

本住居址は、調査区中央よりやや東側に位置する。第4号住居址を切って存在する。東側は斜面になっているため、壁の立ち上がりは不明確であった。とくにカマド東側は、ほとんど検出することはできなかった。

主軸方向　北。平面形・規模　やや隅丸の方形を呈し、規模は3.60×3.35mを測る。壁高20cm。床面状態　ロームによる貼り床であり、比較的堅緻。とくに中央からカマドにかけて、非常に堅緻である。周溝　本住居址の西側半分のみに検出された。かなりしっかりした周溝であり、幅25cm、深さ6cmを測る。柱穴　5本検出された。深さは、P_1・60cm、P_2・12cm、P_3・8cm、P_4・22cm、P_5・26cmを測る。カマド　北壁のやや西寄りに構築されている。左側の袖は残存していたが、右側の袖は一部を残すのみであった。わずかに粘土粒の残痕があった（破線部分）。天井部は崩落し残存せず、煙道部は壁より外側に約35cmほど掘り込まれていたが、それほど焼けていなかった。縦軸90cmを測り、燃焼部は約10cmほど掘り込まれていた。火床は良く焼けており、かなりの灰・焼土が充満していた。（第10図）

出土遺物（第11図・第12図）

1．甕形土器（⅓）。土師器、口径約18.6cm、口辺部は内外とも横なで。外面体部はヘラ削り後粗にヘラなで。内面はヘラなで、全体的に磨滅している。胎土は小砂粒多く、焼成はやや軟弱。色調は外面暗褐色、内面赤褐色を呈する。（±0）

2．甕形土器（⅔）。土師器。口径16.6cm。口辺部は内外とも横なで。体部上位はヘラ削り、下位はヘラ削り後ヘラなで。内面はヘラなで。胎土は小砂粒多くわずかに赤色粒含み、焼成はやや堅緻。色調は、外面暗褐色、内面橙褐色を呈する。（＋5）

3．甕形土器（⅓）。土師器。口径17cm。口辺部は内外とも横なで。体部はヘラ削り、内面はヘラなで。胎土は小砂粒多く、少しの赤色粒、焼成はやや良。色調は内外褐色。（カマド上面）

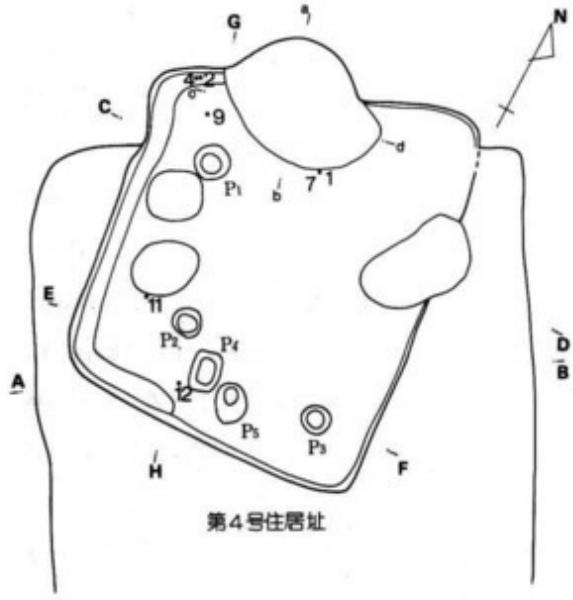
4．杯形土器（⅔）。土師器。墨書土器。口径12.1cm、器高3.6cm、底径5.8cm。体部内外はロクロ成形、底辺部は手持ちヘラ削り。底部は回転糸切り後周辺手持ちヘラ削り。胎土は小砂粒と少しの赤色粒、焼成は堅緻。色調は内外とも橙褐色。（＋5）

5．杯形土器（¼）。土師器。口径12.6cm。口縁部内外とも横なで。体部はヘラ削り後ヘラなで。内面なで。胎土は細砂粒、焼成は堅緻、色調は内外とも赤褐色。（カマド上面）

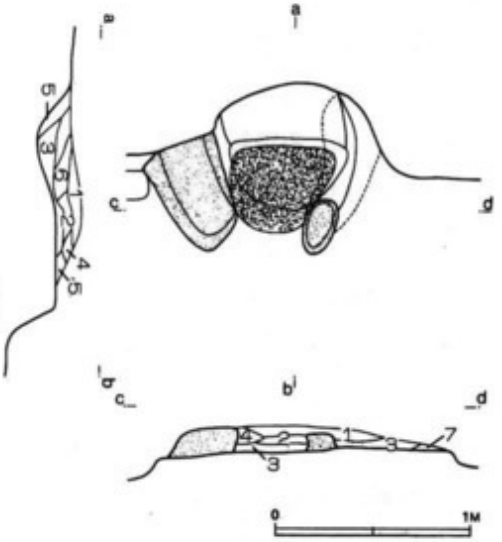
6．底部（⅓）。土師器。墨書土器。底径5.8cm、器面内外はヘラなで、底部ヘラ削り。胎土は小砂粒・石英粒多い、焼成は堅緻。色調は、内外面赤褐色。（カマド内）

7．甑形土器の胴下半部（¼）。土師器。底径12.2cm（推）。器面上位ヘラ削り、下位ヘラ削り後粗にヘラなで。内面はヘラなで後縦方向になで。胎土は小砂粒多い。焼成はやや良。色調は内外とも赤褐色。（±0）

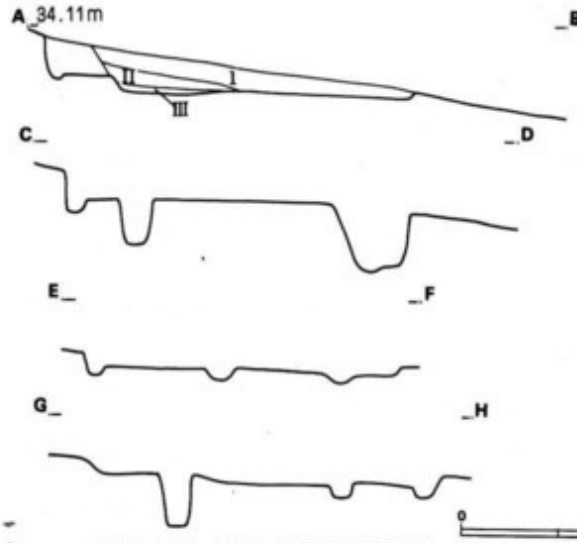
8．高台付杯（⅓）。土師器。口径約19.6cm、底径約11.3cm、器高6.6cm。外面ロクロ成形



第4号住居址



第10図　第3号住居址カマド実測図



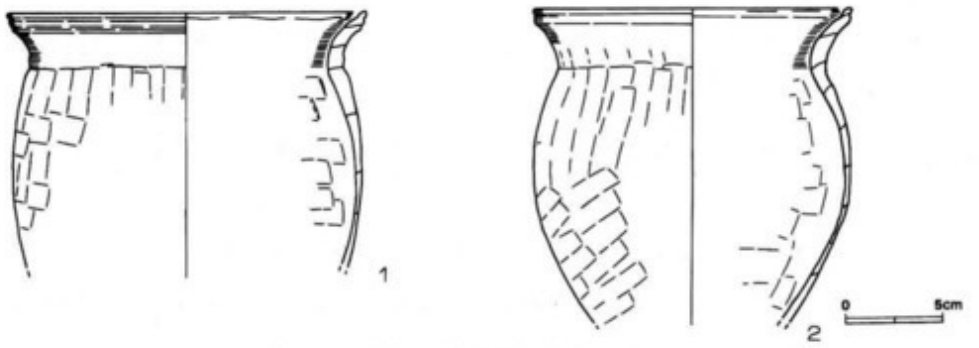
第9図　第3号住居址実測図

住居址層序説明

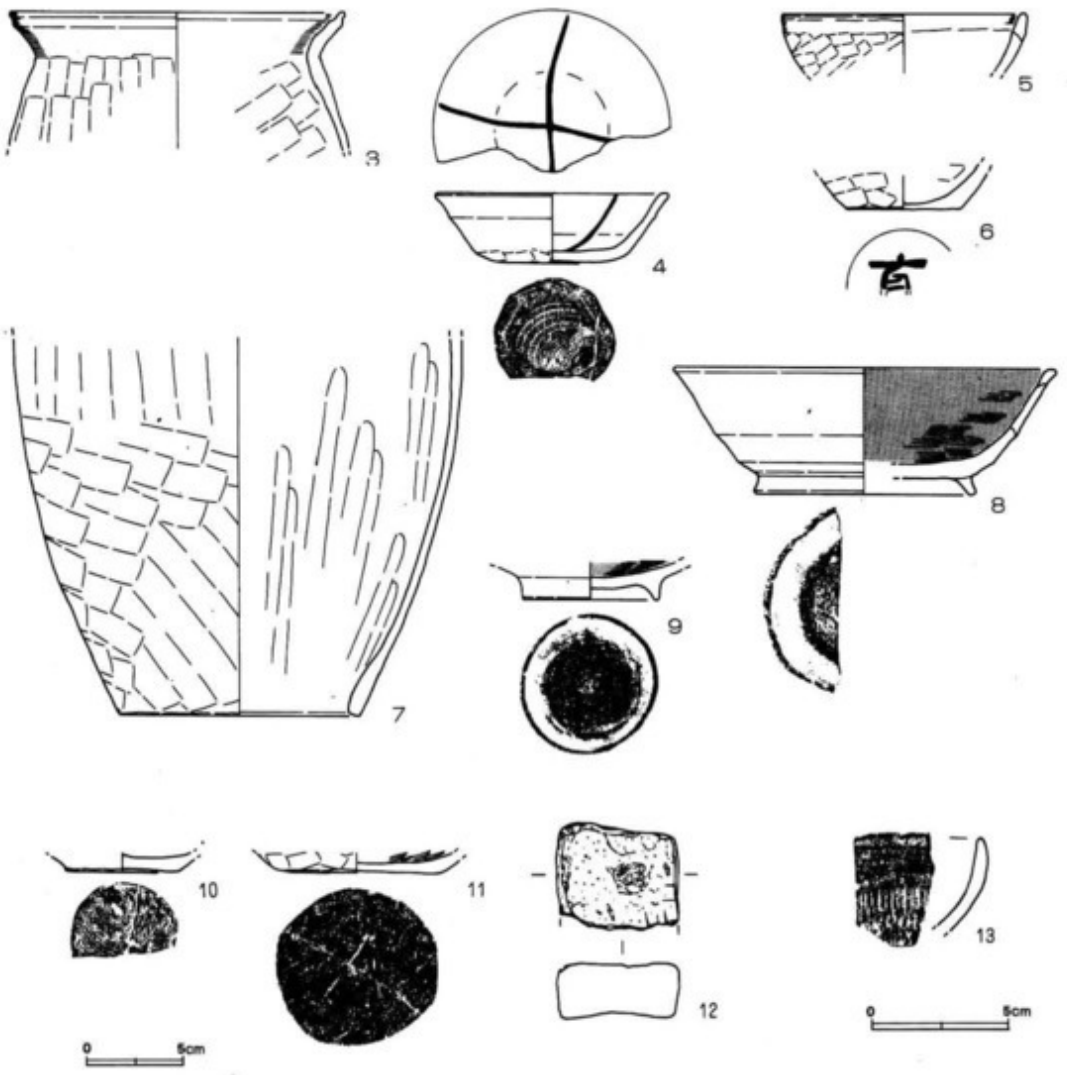
Ⅰ．多量のローム粒を含み、微量の焼土粒を含む黒褐色土
Ⅱ．少量のローム粒を含み、微量の焼土粒含む若干の粘性のある黒褐色土
Ⅲ．多量のローム粒を含み、粘性の強い暗黄褐色土

カマド層序説明

1．多量の焼土粒及び多量の焼土ブロックを含み、少量の砂粒を含む褐色土
2．多量の焼土粒及び多量の焼土ブロックを含み、少量の砂粒を含む赤褐色土
3．少量の炭化粒及び少量の焼土粒を含む黒色土
4．砂質粘土
5．少量の砂粒及び少量の焼土粒を含む暗褐色土
6．微量の焼土粒及び多量の灰土含む灰褐色土
7．ローム土



第11図　第3号住居址出土遺物(1)



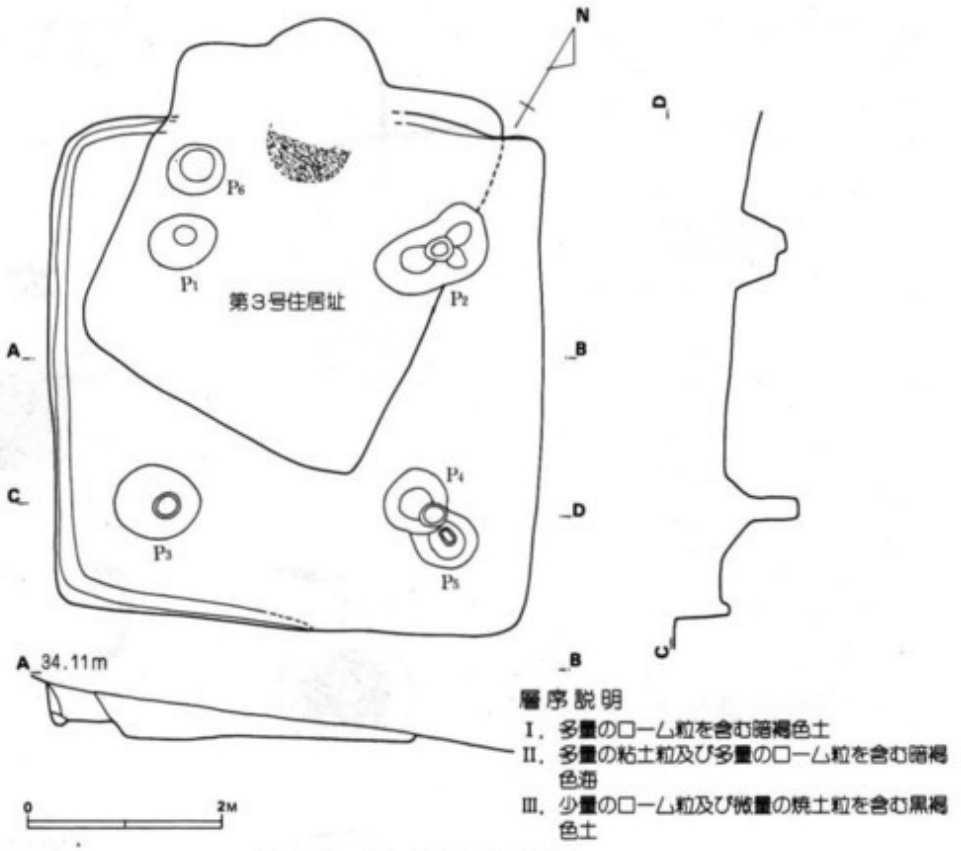
第12図　第3号住居址出土遺物(2)

でやや剝落。内面は内黒でなで後に粗に磨き、底部は回転ヘラ削り。胎土は小砂粒多く、少しの赤色粒、焼成はやや堅緻。色調は橙褐色（外面）。（カマド内）

9．高台付杯。土師器。内黒、底径7cm。外面ロクロ成形、内面ヘラ磨き（密）。底部は回転ヘラ削り。胎土は細砂粒、焼成は堅緻。色調は暗褐色。（＋18）

10．杯形土器の底部（½）。土師器。底径8.3cm。内外面ともロクロ成形、底部は回転糸切り放し。胎土は細砂粒、焼成は堅緻。色調は、内外とも淡い橙褐色。溝出土と接合。（カマド内）

11．杯形土器の底部。土師器。底径8.3cm。底辺部・底部は手持ちヘラ削り、内面は粗にヘラ



第13図　第4号住居址実測図

磨き、胎土は小砂粒多い、焼成は堅緻。色調は外面橙褐色と黒褐色半々、内面橙褐色。(±0)

12. 砥石。砂岩。右下に削痕あり。擦れている。(+15)

13. 杯形土器の口縁部片。土師器。器面にハケ痕あり。(ベルト内)

第4号住居址（第13図）

本住居址は、調査区中央よりやや東側に位置し、第3号住居址に切られて存在する。東側は斜面のため、確認は不明瞭であった。第3号住のカマド下より焼けた火床が検出された（スクリントーン部)。出土遺物は、甕・杯(須恵器)・甑(突起あり)の小破片がある。

主軸方向　北西。平面形・規模　比較的整った方形を呈し、規模は5.10×5.10m。壁高　42cm。床面状態　貼り床で堅緻である。周溝　西側で検出。幅20cm、深さ7cm、柱穴　P_1～P_6が検出される。P_1とP_6は第3号住居址の貼り床除去後に検出。深さは、P_1・66cm、P_2・68cm(西側58cm、北側64cm、東側60cm)、P_3・79cm、P_4・43cm(東側53cm)、P_5・35cm、P_6・23cmを測る。

第5号住居址（第14図）

本住居址は、調査区の南東側に位置している。東側の壁及び床面は、攪乱されており確認できなかった。本来、カマドのある北壁中央付近にはカマドがなく、床面にその痕跡がみられた。点線部内には、焼土及び粘土粒が存在していた。この住居址も東側が斜面であったが、わずかに南東コーナーが残存していたため、本住居址の規模は把握できた。

主軸方向　西北西。平面形・規模　若干隅丸の長方形を呈し、規模は、5.15×4.70mを測る。壁高　80 m。壁はしっかりしており、ほぼ垂直に立ち上がる。床面状態　ロームによる貼り床がなされており、堅緻である。とくに中央付近は堅緻である。東側は、前述したように攪乱を受けており検出できなかった。周溝　残存する部分において全周する。かなりしっかりしており、規模は幅20cm、深さ10cmを測る。柱穴　主柱穴P_1～P_3、支柱穴P_4が検出された。もう一本主柱穴と考えられる南東コーナー寄りは、攪乱のため検出できなかった。主柱穴は、いずれもしっかりし、深く掘り込まれている。支柱穴P_4は、径55cmの円形状を呈している。各柱穴の深さは、P_1・57cm、P_2・53cm、P_3・75cm、P_4・24cmを測る。貯蔵穴　検出できなかった。

出土遺物（第15図・第16図）

1．甕形土器（⅓）。土師器。口径約21.2cm。口辺部は、内外面とも横なでされる。外面体部は、ヘラ削り後粗になでられ、内面はヘラなでされる。胎土は、小砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。色調は、外面橙褐色、内面暗褐色を呈す。（覆土中）

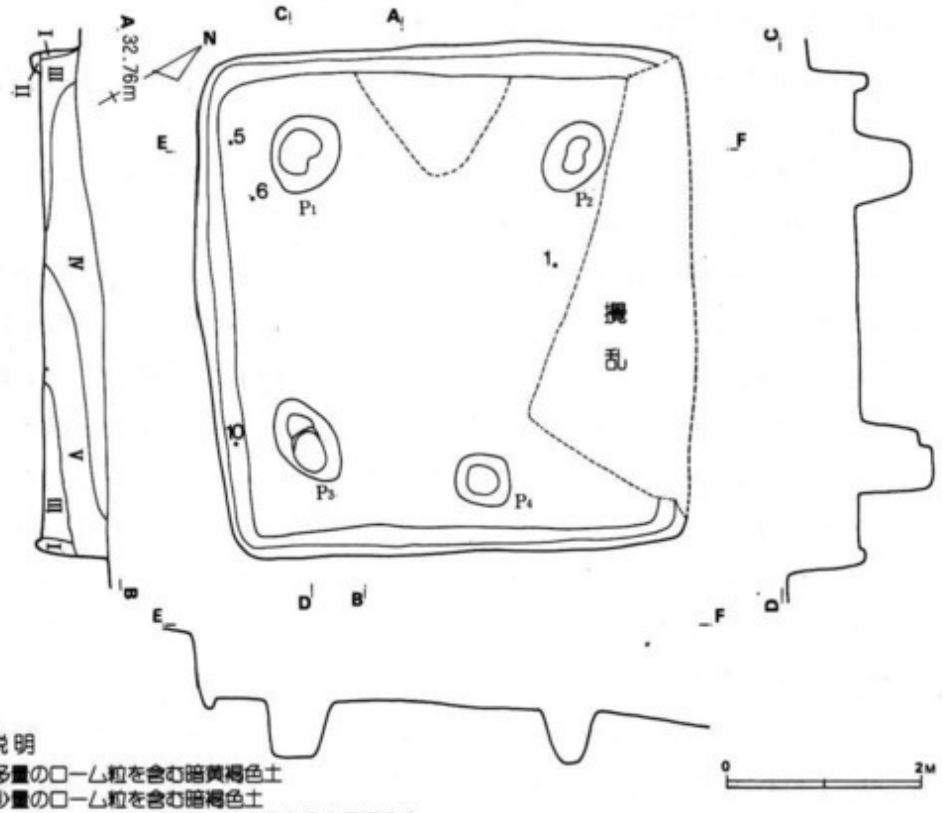
2．甕形土器（¼）。土師器。口径約20.6cm。口辺部は、内外面とも横なでされる。外面体部は、ヘラ削り後なでられ、内面はヘラなでされる。胎土は、小砂粒及び石英粒を多く含み、焼成はやや堅緻である。色調は、外面橙褐色、内面褐色を呈す。（±0）

3．甑形土器（⅓）。土師器。口径約29.6cm。口辺部は、内外面とも横なでされる。外面口縁部直下に輪積痕がみられる。また、頸部と体部の屈曲部に突起を付している。個数は不明である。体部は、ヘラ削り後粗になでられているが、下位ほど密になでている。内面はヘラなでされる。胎土は、小砂粒多く、わずかに赤色粒を含み、焼成は堅緻である。色調は、内外面とも赤褐色を呈する。（覆土中）

4．甑形土器（¼）。土師器。口径約26.2cm。口辺部は、内外面とも横なで。3と同一箇所に突起を付す。体部はヘラ削り後粗に磨きをかけ、内面上位はヘラなで後磨きかなでを施す。下位は磨きを縦に施す。胎土は小砂粒・雲母片を含み、焼成はやや堅緻である。。色調は、外面赤褐色、内面暗褐色と黒色半々をなす。（覆土中）

5．高台付杯（½）。須恵器。口径約22.4cm、器高4.6cm、底径14.1cm。器面は、内外面ロクロ成形。底部は磨滅し不明瞭であるが、回転ヘラ削りと思われる。胎土は、小砂粒・石英粒を含み、焼成は堅緻。色調は、内外とも淡灰色を呈す。（+18）

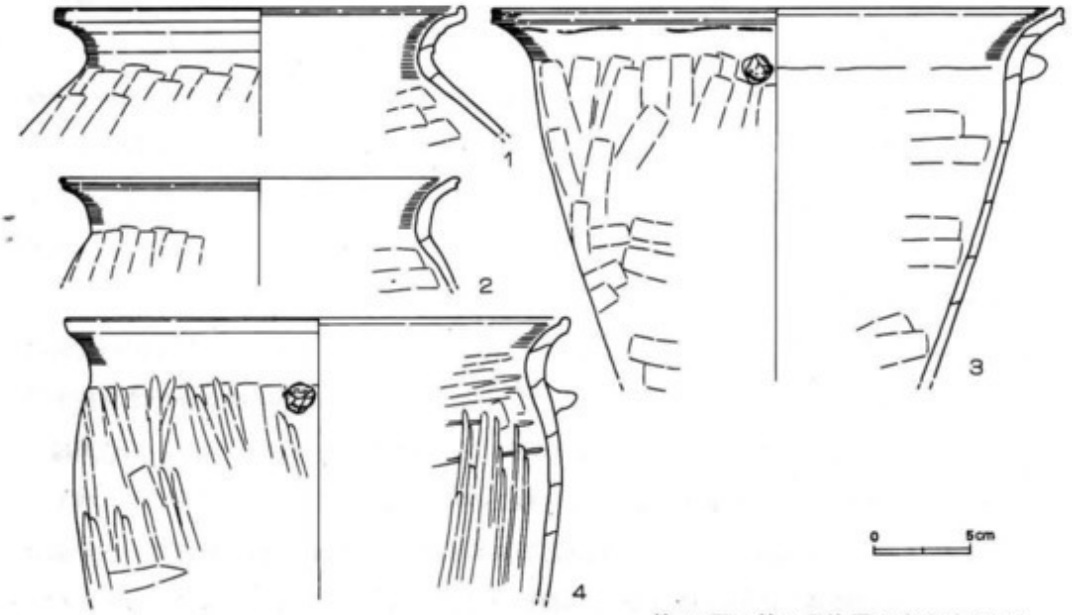
6．高台付杯（⅓）。須恵器。底径約10.3cm。器面は、内外面ともにロクロ成形される。底部



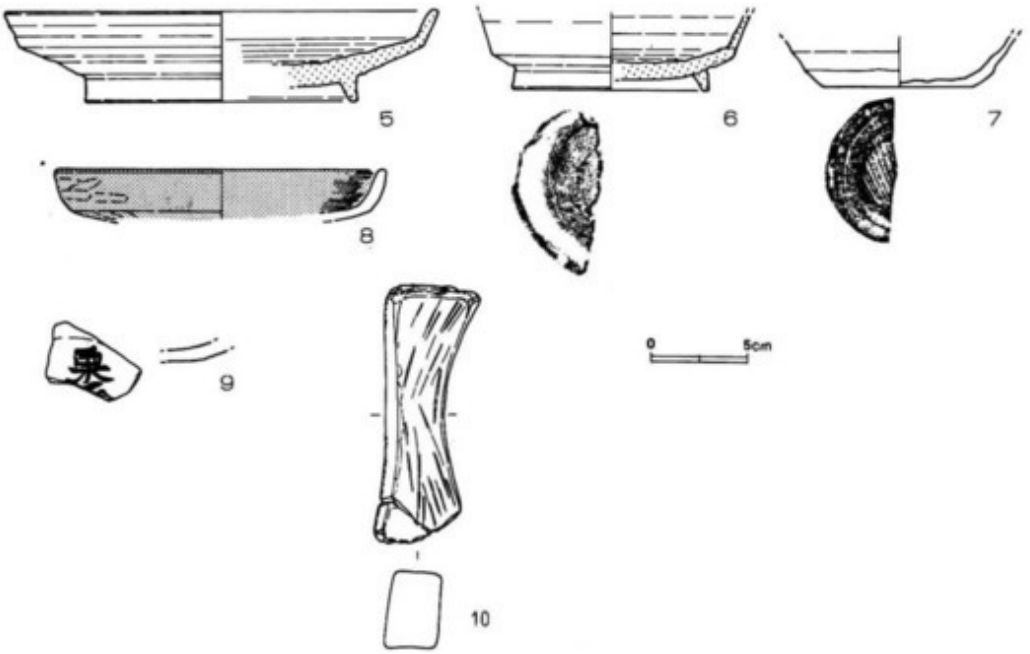
層序説明

Ⅰ．多量のローム粒を含む暗黄褐色土
Ⅱ．少量のローム粒を含む暗褐色土
Ⅲ．少量のローム粒及び微量の焼土粒を含む黒褐色土
Ⅳ．少量のローム粒及び微量の焼土粒を含む暗褐色土
Ⅴ．多量のローム粒及び多量のロームブロックを含み、微量の焼土粒を含む暗褐色土

第14図　第5号住居址実測図



第15図　第5号住居址出土遺物(1)



第16図　第5号住居址出土遺物(2)

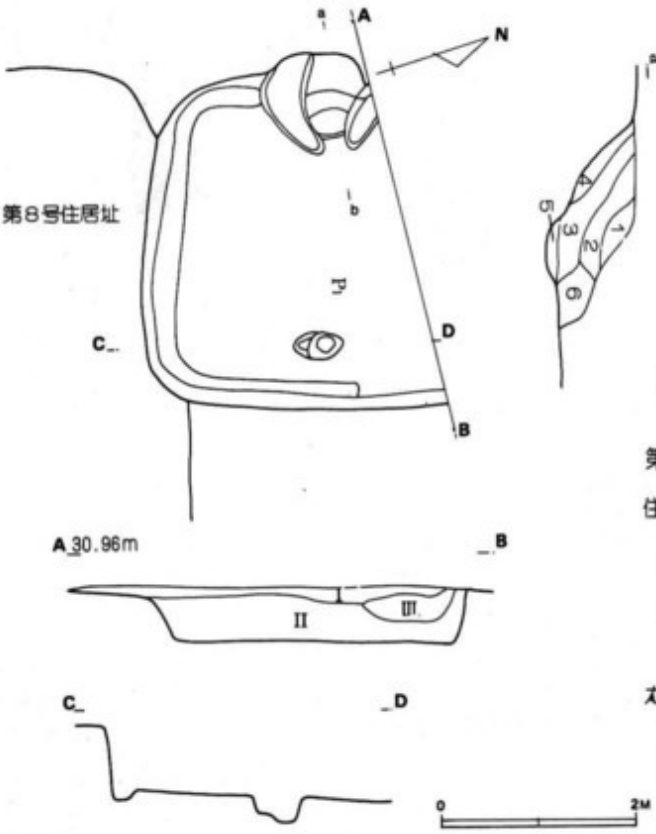
は、小砂粒多く、石英粒を少し含み、焼成は堅緻である。色調は、内外面ともに淡灰色を呈している。(+12)

7．杯形土器（½）。土師器。口縁部を欠損。底径7.8cm。体部及び内面は、ロクロ成形。底辺部は、回転ヘラ削りされ、底部は静止糸切り後周囲を回転ヘラ削りする。内面は、剥落が著しい。胎土は、石英粒及び細砂粒を含んでおり、焼成はやや良好である。色調は、内外面とも暗褐色を呈する。(覆土中)

8．盤形土器（⅕）。土器器。底部を欠損。口径約17.2cm。外面は、ヘラなで後ていねいになでられ、少々磨かれている。内面はヘラ磨きされている。内外面とも赤彩される。胎土は、細砂粒を含み、焼成は堅緻である。(覆土中)

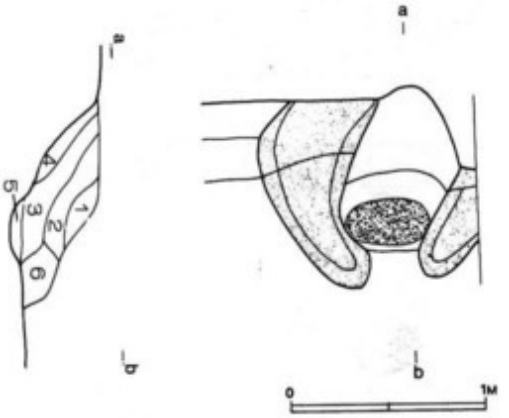
9．杯形土器の底部片。土師器。墨書土器。「栗」とその下位にもあるが、不明である。胎土は、細砂粒及び黒雲母粒を含み、焼成は堅緻。色調は、内外面とも橙褐色。(覆土中)

10．砥石。石質は砂岩である。表面には、鋭い工具を砥いだ痕がみられる。両側面及び裏面は擦れている。現長13.3cm、厚さ4.0cmを測る。(±0)



第17図　第6号住居址実測図

第19図　第6号住居址出土遺物



第18図　第6号住居址カマド実測図

住居址層序説明

Ⅰ．表　土
Ⅱ．少量のローム粒及び微量の焼土粒を含むよくしまっている黒褐色土
Ⅲ．少量のローム粒及び微量の焼土粒を含む暗褐色土

カマド層序説明

1．微量の砂粒及び微量のローム粒を含む黒褐色土
2．微量の焼土ブロックを含む砂質粘土
3．少量の砂粒を含み、多量の粘土粒及び多量の焼土ブロックを含む赤褐色土
4．少量の焼粒及び少量のローム粒を含み、少量の炭化粒を含む暗褐色土
5．少量のローム粒及び少量の焼土粒を含む黒褐色土
6．少量の砂粒及び少量の焼土粒ブロックを含み、少量のロームブロックを含む暗褐色土

第 6号住居址（第17図）

本住居址は、調査区の東端部に位置している。第8号住居址に切られて存在する。第8号住居址のカマドが、本住居址の南東コーナーに張り出して作られ、上面を覆っていた。本住居址の北側は、調査区外のため確認できなかった。

主軸方向　西北西。**平面形・規模**　残存する部分において、コーナーは隅丸を呈し、規模は南北3.45mを測る。**壁高**　60cm。かなりしっかりしている。**床面状態**　ロームによる貼り床であるが、比較的軟弱である。とくに北側は、若干斜面になっているためか他より軟弱である。**周溝**　東壁下で切れているが、残存する部分において巡っている。非常にしっかりしており、

規模は幅20cm、深さ8cmを測る。柱穴　カマドの対面、東壁寄りに1本検出された(P1)。二段掘り状を呈しており、南側は深さ18cm、北側は26cmを測る。カマド　西壁に構築されている。煙道部は、壁より約5cmほど外側に掘り込まれている程度であり、天井部は崩落し残存していなかった。右袖は、調査区外のため完掘できなかった。左袖は、かなりしっかりと残存していた。縦軸は約100cmを測る。火床は、約5cmほど掘り込まれ、その箇所がすこし焼けていた。(第18図)　貯蔵穴　検出できなかった。

出土遺物(第19図)

1．杯形土器(¼)。土師器。口径13.2cm(推)を測る。口縁部は、内外面とも横なでを施す。体部外面は、ヘラ削り後なでられ、少々の磨きがなされている。内面体部は、なで後ヘラ磨きされている。胎土は小砂粒を多く含み、焼成はやや堅緻である。色調は、内外面ともに赤褐色を呈する。(覆土中)

他に、灰釉の蓋形土器が検出されたが、小破片のため実測不可能であった。

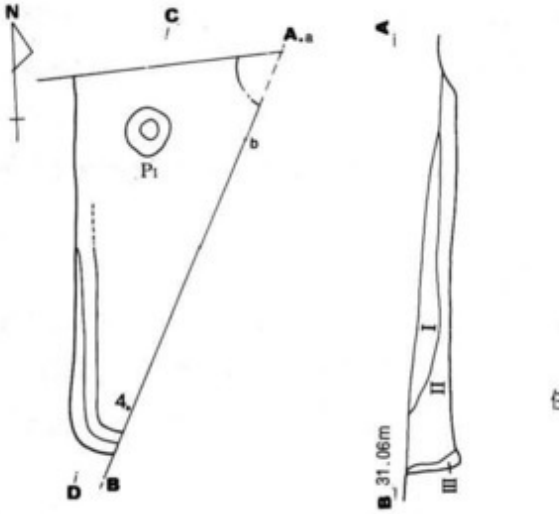
第7号住居址(第20図)

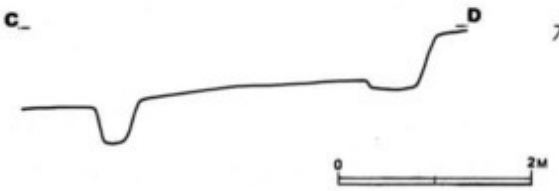
本住居址は、調査区の東端に位置している。北側は調査区外、東側は削除され検出できなかった。本住居址の北西側は、斜面のため、壁及び床面が流れた状態になっており、明確に捉えることはできなかった。

主軸方向　北?。平面形・規模　残存する南西コーナーは若干隅丸を呈するが、全体のプランは不明である。また規模についても不明である。壁高　48cm(南壁)。残存する部分は、かなりしっかりしている。床面状態　南側においては、ロームによる貼り床がなされ、かなり堅緻である。北西からカマド周辺は、貼り床がなされておらず、流れた可能性が高い。周溝　壁が残存する南西側に検出できた。それより北側は確認できなかった。規模は、幅15cm、深さ5cmを測る。柱穴　北西側に1本検出された(P1)。上部は、斜面であったため、本来の姿では検出できず、深さも床面が存在しなかったため比較的浅くなっている。残存する部分で、規模は径45cmの円形を呈し、深さ38cmを測る。カマド　ほとんど調査区外のため、完掘できなかった。左側の袖は砂質粘土によって構築され残存していた。火床は、明確に捉えられず、おそらく、第3層と第5層の境に本来の火床が存在したと思われる。遺物は、何も検出できなかった。(第21図)。

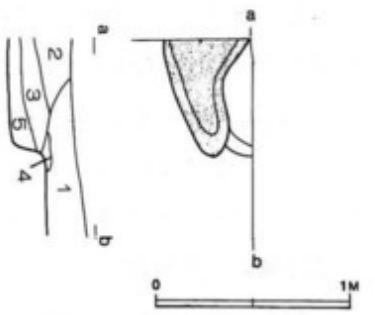
出土遺物(第22図)

1．杯形土器(¼)。土師器。口径14.4cm(推)、器高3.2cm、底径8.4cm(推)を測る。外面口縁部は横なでされる。体部は、ヘラ削り後ヘラなでされる。底部はヘラなでを施している。内面は、全体的にヘラ磨きを施している。胎土は粗砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は、外面とも赤褐色を呈する。(覆土中)





第20図　第7号住居址実測図



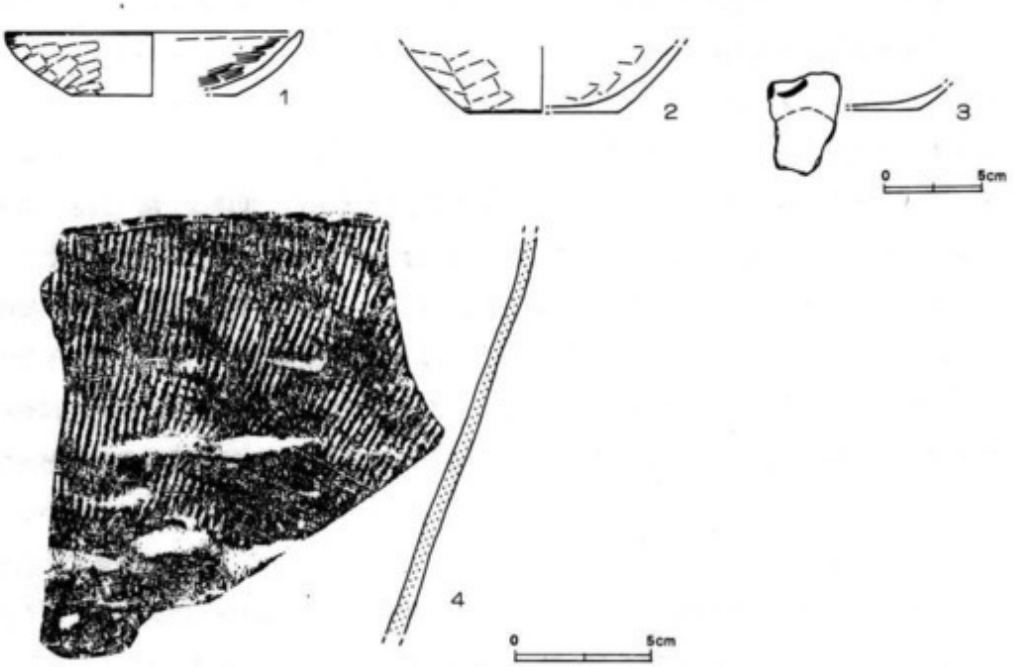
第21図　第7号住居址カマド実測図

住居址層序説明

Ⅰ．少量のローム粒及び微量の焼土粒を含む黒褐色土
Ⅱ．第1層よりも若干量の多いローム粒を含み、微量の焼土粒を含む黒褐色土
Ⅲ．多量のローム粒を含む暗黄褐色土

カマド層序説明

1．少量の焼土粒及び少量のローム粒を含む黒褐色土
2．少量の焼土粒及び多量の砂粒を含む暗褐色土
3．多量の焼土粒及び多量の焼土ブロックを含む暗褐色土
4．多量の砂粒及び多量の焼土ブロックを含む赤褐色土
5．微量の焼土粒を含む黒色土



第22図　第7号住居址出土遺物

2．甕形土器の底部（⅓）。土師器。底径8.0cm(推)を測る。外面体部はヘラ削り後ヘラなでされ、底部もヘラ削り後ヘラなでされる。内面はヘラなでを施している。全体的に剥落が著しい。胎土は、小砂粒・石英粒を多く含み、焼成はやや堅緻である。色調は、外面が褐色、内面が暗褐色を呈する。(覆土中)

3．杯形土器の底部。土師器。墨書土器。調整は、内外面ともヘラなでされている。胎土は、小砂粒多く含み、焼成は堅緻である。色調は、内外面とも褐色。(4と同一地点出土、+33)

4．甕形土器の胴部片。須恵器。器面には、タタキ目が残っている。下位の方はなでもしくはヘラなでがなされている。(+33)

第8号住居址（第23図）

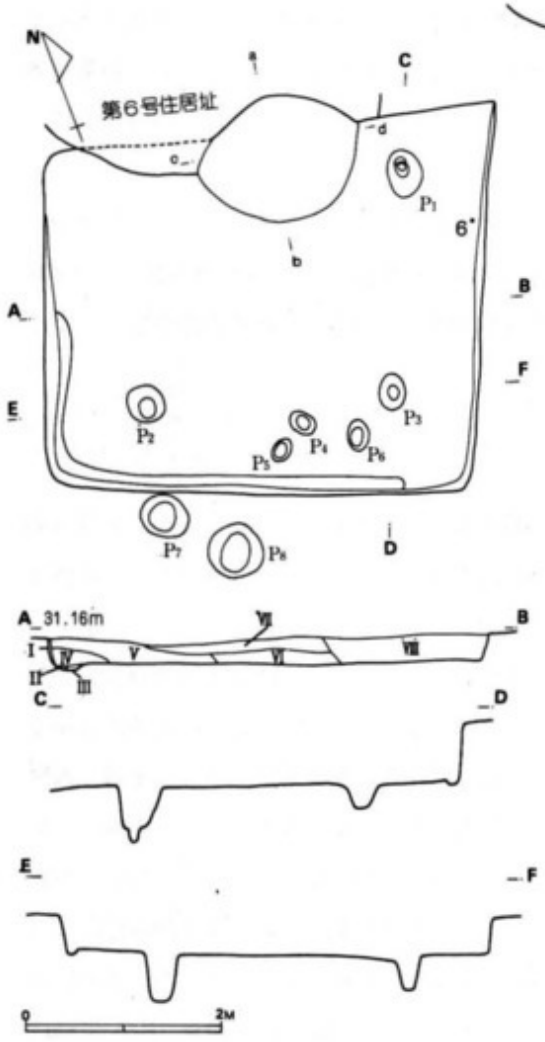
本住居址は、調査区の東端部に位置している。第6号住居址を切って存在するが、北側は斜面のため、かなり流れていた。そのため、北壁は検出できなかった。また、本住居址の北西部及び東壁の北側は、攪乱されていた。

主軸方向　北北西。平面形・規模　やや隅丸の方形を呈すと思われ、規模は東西440cmを測る。壁高　61cm(南壁)。床面状態　ロームによる貼り床がなされ、堅緻である。北西側はかなり攪乱を受けている。土層断面を見ても、東側は攪乱を受けていることがわかる。周溝　西壁の南側、南壁下に検出された。他は、攪乱もしくは斜面のため確認できなかった。規模は、幅17cm、深さ5cmを測る。柱穴 主柱穴P_1～P_3、支柱穴P_4～P_6が検出された。また南壁の外側からP_7・P_8が検出されたが、本住居址に付属するかは不明である。ただ、覆土が本住居址のものと類似していたため、ここに提示した。北西側は攪乱のため検出できなかった。各柱穴の深さは、P_1・58cm、P_2・49cm、P_3・23cm、P_4・24cm、P_5・17cm、P_6・18cm、P_7・60cm(確認面より)、P_8・65cm(同)を測る。カマド　北壁のほぼ中央に構築されている。第6号住居址に張り出して造られていたが、攪乱及び斜面のため削られた状態になっていた。わずかながら両袖が残存しており、火床も若干検出された。土層断面を見ると、第Ⅳ層に焼土粒・焼土ブロック・灰が多く含まれていた。(第24図)

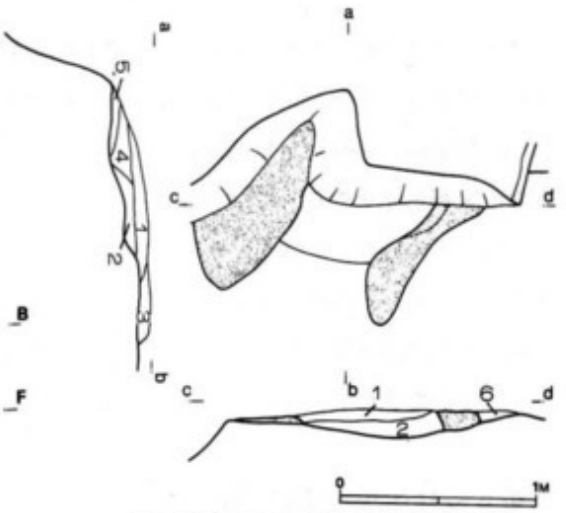
出土遺物（第25図・第26図）

1．甕形土器（⅓）。土師器。口径12.1cm(推)を測る。口辺部は、内外面とも横なでされる。外面体部は、ヘラ削り後ヘラなでされる。内面はヘラなで後なでられる。胴下半部を欠損するが、小型の甕を呈すると思われる。この土器は、第7号住の覆土検出の破片と接合した。胎土は小砂粒多く含み、焼成は堅緻である。色調は、内外面とも赤褐色を呈す。(覆土中)

2．杯形土器（½）。土師器。口径13.3cm、底径5.0cm、器高3.0cmを測る。口縁部は、内外面とも横なでされる。外面体部は、一部(上位)磨かれているが、全体的になで(丁寧)られている。底部は、ヘラ削りされている。内面は、密にヘラ磨きされている。胎土は、細砂



第23図　第8号住居址実測図



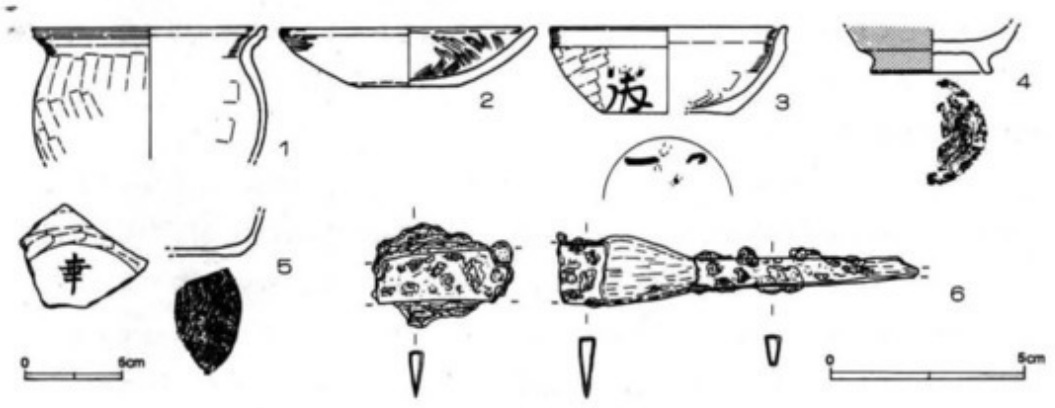
第24図　第8号住居址カマド実測図

住居址層序説明

Ⅰ．多量のローム粒を含む暗黄褐色土
Ⅱ．多量のローム粒を含む暗褐色土
Ⅲ．第Ⅱ層よりも量の多いローム粒を含む暗褐色土
Ⅳ．少量のローム粒を含む黒褐色土
Ⅴ．少量のローム粒及び少量のロームブロックを含み、微量の焼土粒を含む暗褐色土
Ⅵ．多量のローム粒及び多量のロームブロックを雑降り状に含む暗褐色土
Ⅶ．微量のローム粒及び微量の炭化粒を含む黒褐色土
Ⅷ．多量のローム粒及び多量のロームブロックを雑降り状に含み、微量の焼土粒を含む黒褐色土。一部撹乱を受けている

カマド層序説明

1．多量のローム粒及び少量の焼土粒を含む橙褐色土
2．少量の焼土粒及び少量の砂粒を含み、少量の炭化粒を含む黒色土
3．少量のローム粒及び少量の焼土粒を含む暗褐色土
4．多量の焼土粒及び多量の焼土ブロックを含み、多量の灰を含む灰褐色土
5．多量のローム粒及び少量の焼土粒を含み、少量の灰を含む褐色土
6．少量のローム粒を含む黒褐色土



第25図　第8号住居址出土遺物(1)

第26図　第8号住居址出土遺物(2)

粒を含み、焼成は堅緻である。色調は、内外面とも赤褐色を呈す。(覆土中)

3．杯形土器（⅓)。土師器、墨書土器。口径12.3cm(推)、底径6.5cm(推)、器高4.4cmを測る。外面口縁部は横なでされ、体部はヘラ削り後ヘラなでされる。底部はヘラなでされる。内面は、体部中位まで横なでされており、下位はヘラなでを施している。体部の文字は、二文字と考えられるが、上の文字は不明瞭である。また、底部にも墨書がみられるが、ほとんど判読できなかった。内外面とも剝落している。胎土は、小砂粒多く含み、焼成はやや堅緻である。色調は、内外面とも赤褐色を呈す。(第7号住の覆土検出の破片と接合、覆土中)

4．高台付杯（⅓)。土師器。底径6.3cm(推)を測る。器面は、全体的に剝落しており、調整は内外面ともロクロ調整と思われ、底部は回転糸切り？　と考えられる。外面体部は、赤彩されている。胎土は、細砂粒少量とわずかに雲母粒を含み、焼成はやや堅緻である。色調は、内面が橙褐色を呈す。(カマド内)

5．杯形土器の底部。土師器。墨書土器。外面体部及び内面は、ロクロ調整され、底辺部は手持ちヘラ削りされる。底部は、回転糸切り後周囲(幅2cm)を手持ちヘラ削りしている。底部に墨書がみられる。胎土は、細砂粒及びわずかに赤色粒子を含み、焼成は非常に堅緻である。色調は、内外面とも淡い橙褐色を呈す。(覆土中)

6．刀子。右側(柄の部分)には、木質が残っている(厚さ約1.5mm)。鉄の厚さは、約1m　程程度を測る。(±0)

7．甕形土器の胴上部片。須恵器。器面にはタタキ目がみられる。(覆土中)

8．甕形土器の胴部片。須恵器。器面にはタタキ目がみられる。(覆土中)

他に、灰釉の甕(小破片)が検出された。

第27図　第9号住居址実測図

第9号住居址（第27図）

本住居址は、調査区のほぼ中央寄りに位置する。第2号住居址に切られて存在する。東側及び南側は、急激に傾斜しており検出できなかった。また、カマド(北側)が本来存すると思われる所は、第2号住によって削られていた。わずかに残っていた覆土は、ローム粒少量混じりの黒褐色土であった。

主軸方向　北西？。平面形・規模　残存する南西コーナーは隅丸を呈するが、規模は不明である。壁高　約10cm(西壁)。床面状態　ロームによる貼り床であるが軟弱である(西側のみ)。周溝　残存する壁下に巡っている。幅7cm、深さ5cm。

出土遺物に、須恵器の甕形土器片が検出。

(2) 土　　壙

第1号土壙（第28図）

本土壙は、調査区中央よりやや南東側に位置する。第1号住居址に切られて存在する。平面形は、若干隅丸の長方形を呈し、規模は約270×90cmを測る。底面は、かなり凹凸が激しく、中央付近に縦軸約120cmの楕円形を呈した落ち込みがみられる。また、それよりやや北西側に40×35cmの円形状のピットが検出された。深さ約20cmを測る。中央付近は、ややすり鉢状に掘り込まれ、深さ約40cmを測る。両先端部付近は、約10～15cmの深さでフラットになっている。スクリントーン部分は、層序説明の第Ⅳ層であり、カマドの袖部に用いる粘土が敷いてあった。厚さは約5～8cmを測り、落ち込み部を覆うように検出された。その粘土部より下は、第Ⅱ層で示しているように、焼土粒を含む黒褐色土が堆積していた。

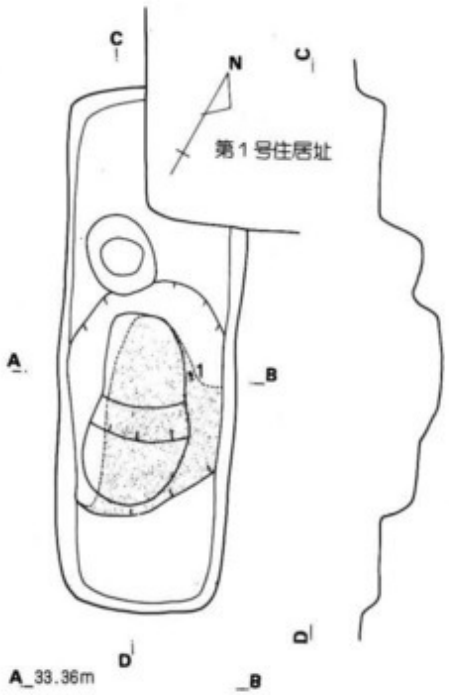
出土遺物（第29図）

1．鉄製鏃。直刀鏃である。現長12.9cm、幅3.4cm、厚さ0.3cm。(+27)

2．砥石。砂岩。径0.5cmの穿孔あり。上・下位に擦痕がみられる。(覆土中)

3．須恵器片。器面にはタタキが施されている。(覆土中)

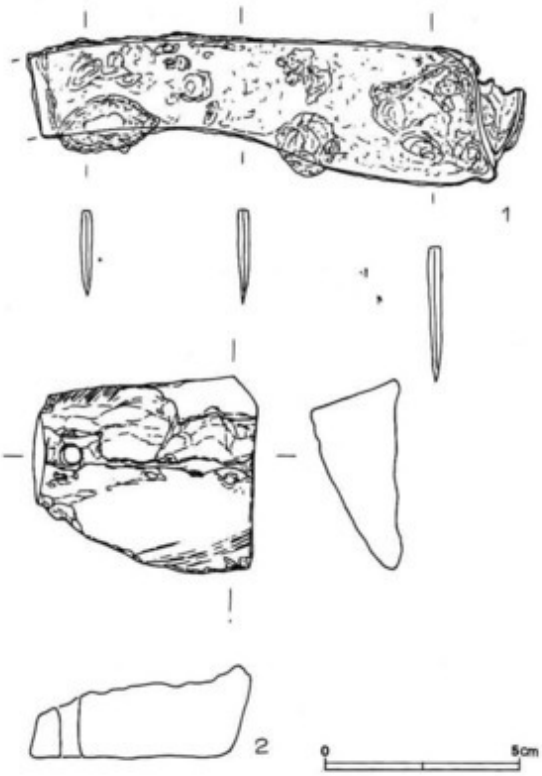
他に、甕形土器（土師器）の口縁部・底部小片、杯形土器（土師器）の口縁部片が検出。



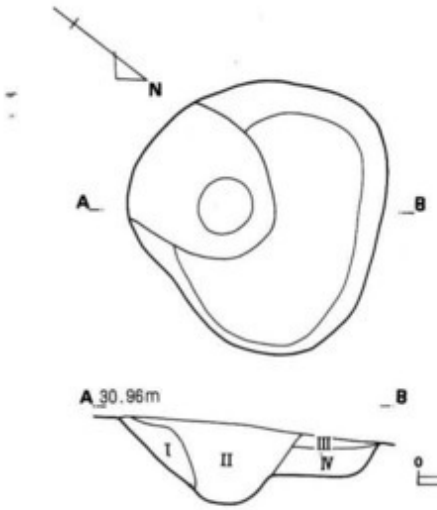
層序説明

Ⅰ．少量のローム粒及び微量の焼土粒を含む黒色土
Ⅱ．少量のローム粒及び微量の焼土粒を含み、少量の灰色粘土粒を含む黒褐色土
Ⅲ．多量のロームブロックを含む暗黄褐色土
Ⅳ．多量のロームブロック及び微量の焼土粒を含み、多量の灰色粘土粒を含む固くしまっている暗灰褐色土

第28図　第1号土壙実測図



第29図　第1号土壙出土遺物



層序説明

Ⅰ．少量のローム粒を含む黒褐色土
Ⅱ．微量のローム粒を含む黒色土
Ⅲ．微量のローム粒を含む暗褐色土
Ⅳ．多量のローム粒を含む暗黄褐色土

第30図　第2号土壙実測図

第２号土壙（第30図）

本土壙は、調査区の東側に位置している。規模は、130×140cmを測り、不整の円形を呈する。南側が緩やかに掘り込まれており、その深さは約50cmを測る。底面は、25×30cmの円形を呈する。北側は、約20cmほどの深さでフラットになっている。

本土壙より、遺物は何も検出されなかった。

（３） 掘立柱建物址

第１号掘立柱建物址（第31図）

本遺構は、調査区の中央に位置している。北西―南東方向に列をなしているが、東側は急斜面で西側は撹乱を受けており、その展開及び規模は不明である。上位２個と下位１個は、有段状に掘り込まれており、とくに最上位と最下位のピットは、西側が深く掘り込まれている。深さは、上位が85cm、下位は10cmほど内側に入っており、深さ85cmを測る。これらは、東側に向かって掘り込まれたと言えよう。全長は、約6.0mを測る。

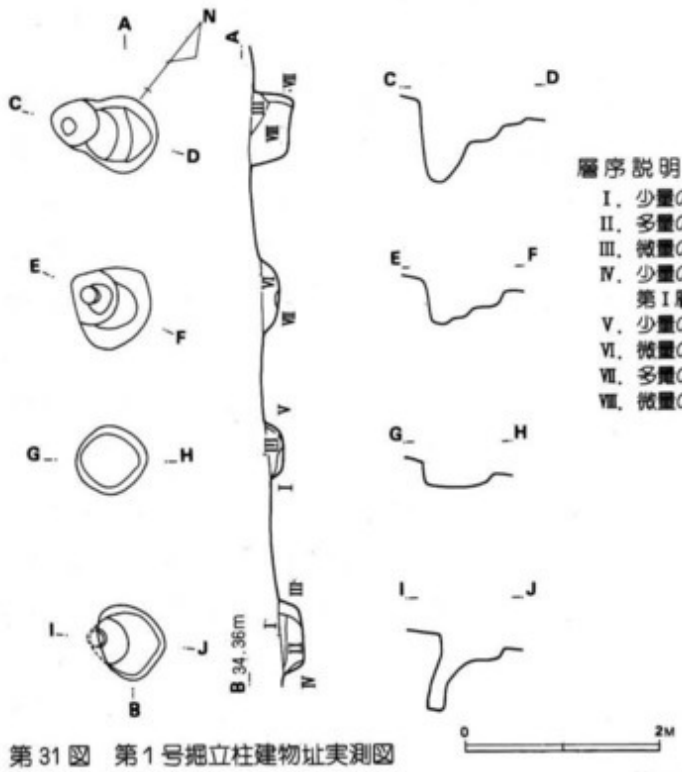
出土遺物（第32図）

１．甕形土器の胴部片。須恵器。器面には、タタキが施されている。第２号住居址出土の須恵器片（タタキ目）と同一個体である。（最下位のピット覆土中）

第２号掘立柱建物址（第33図）

本遺構は、調査区の南東側、第１号住居址の南側に隣接する。南側は、撹乱されており完掘できなかった。主軸方向は、北西―南東と考えられ、形状は２×２間を呈する。その規模は、横325cm、縦410cmを測り、縦の２個が有段状に掘り込まれている。各ピットの深さは、13～23cmで、形状はほぼ円形状を呈する。深さは、確認面でのものであり、A－Bではかなり傾斜しているため、実際の深さは東側と西側で異なると思われる。各ピットの底面及び側面は、第１号掘立柱建物址と違って、かなり軟弱であった。

出土遺物は、小破片の土師器（器種は不明）が検出された。

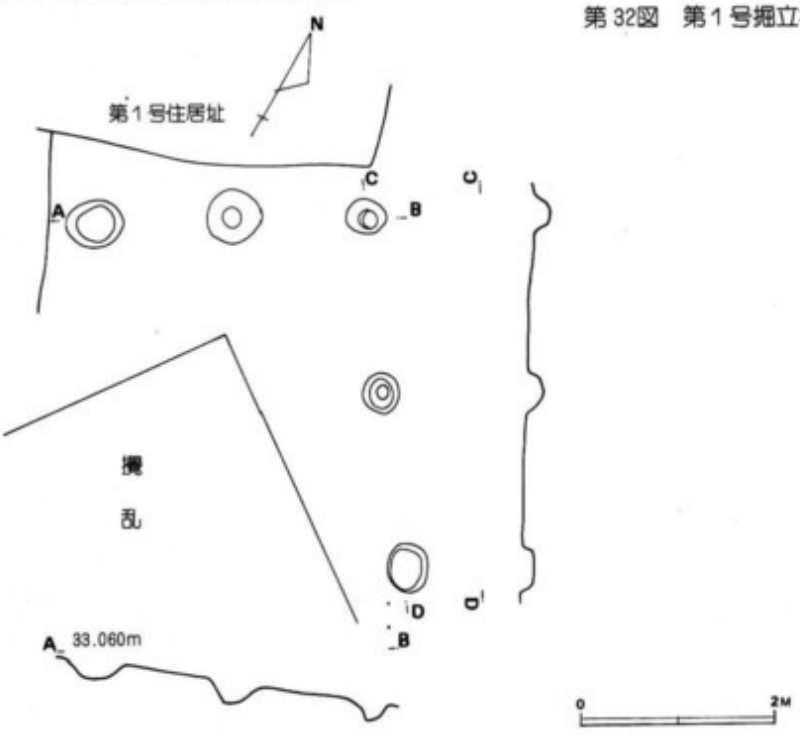


層序説明

Ⅰ．少量のローム粒を含む黒褐色土
Ⅱ．多量のローム粒を含む暗褐色土
Ⅲ．微量のローム粒を含む暗褐色土
Ⅳ．少量のローム粒及び少量のロームブロックを含み、第Ⅰ層より粘土が少い黒褐色土
Ⅴ．少量のローム粒を含む暗褐色土
Ⅵ．微量のローム粒を含む黒褐色土
Ⅶ．多量のローム粒を含む暗黄褐色土
Ⅷ．微量のローム粒を含む黒色土

第31図　第1号掘立柱建物址実測図

第32図　第1号掘立柱建物址出土遺物



第33図　第2号掘立柱建物址実測図

（4） 溝状遺構及びピット群（第34図）

本遺構は、調査区中央よりやや南東側に位置している。南側に第1号住居址、西側に第3・4号住居址が隣接している。これらの住居址と本遺構の標高差は、150～200cm程あり、かなり急斜面下に存在する。北側は、調査区外のため、その全容は把握できなかった。だが、その展開は、第2図の調査区外に沿って北西方向に伸びているのが確認できた。また、北東側にある小谷津に落ちていくのも確認できた。覆土において、第Ⅳ層・第Ⅴ層で焼土粒混じりの黒褐色土がみられ、この層よりかなりの土器片が検出された。ほとんどが小破片であり、中には完形に近いものもあったが、いずれも廃棄した様に出土していた。深さは、確認面より約80cm（Aポイント側）程掘り込まれ、底面及び側面とも凹凸がみられるが、かなり堅緻であった。

この溝状遺構に付属すると思われるピット群が存在している。溝内と外側に存しており、合計15個を数える。溝内のピットは、有段状のものが深く、63～67cmを測り、他は20～30cmであった。外側のピットも、有段のものと単純なものがあり、前者は約50cm、後者は20～30cm（確認面より）を測る。外側にあるピットは、溝に向かって掘り込まれている様に思われる。

この溝状遺構及びピット群は、何らかの施設もしくは付属するものと考えられるが、今回はその性格を明らかにするまでには至らなかった。

出土遺物（第35図）

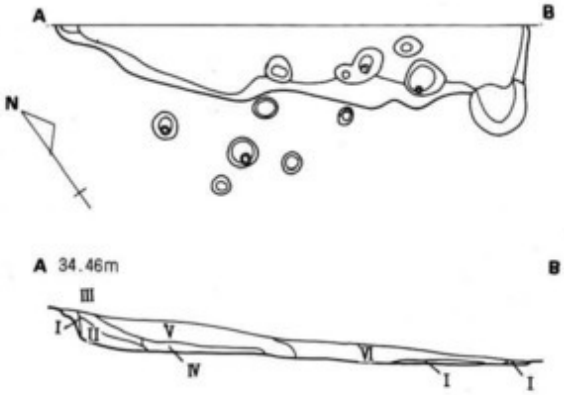
1．甕形土器（¼）。土師器。口径20.6cm（推）。口辺部は、内外面とも横なでされる。体部外面はヘラ削り、内面はヘラなでされる。胎土は小砂粒多く含み、焼成は堅緻である。色調は、内外面とも赤褐色を呈する。（覆土中）

2．甕形土器（½）。土師器。口径18.2cm（推）。口辺部は、外面が横なで、内面が横なで後所所ぬなでを施されている。外面体部はヘラ削り、内面はなでられ輪積痕がみられる。胎土は、細砂粒を含み、焼成は堅緻である。色調は、内外面茶褐色を呈する。（覆土中）

3．杯形土器。土師器。口径11.5cm、器高4.0cm、底径6.7cm。体部は、内外面ともロクロ調整されている。底部は、静止糸切りされ、周辺は手持ちのヘラ削りがなされている。底部には墨書がみられる。胎土は、細砂粒・赤色粒子を含み、焼成は堅緻である。色調は、内外面とも橙褐色を呈する。（覆土中―第Ⅴ層）

4．杯形土器（½）。土師器。口径13.6cm、底径7.0cm（推）、器高4.5cm。外面口縁部は、横なでされ、体部はヘラ削り後ヘラなで（粗）される。底部はヘラ削りである。内面は、ていねいになでられている。胎土は、小砂粒多く含み、焼成は堅緻である。色調は、内外面とも暗褐色を呈する。（覆土中）

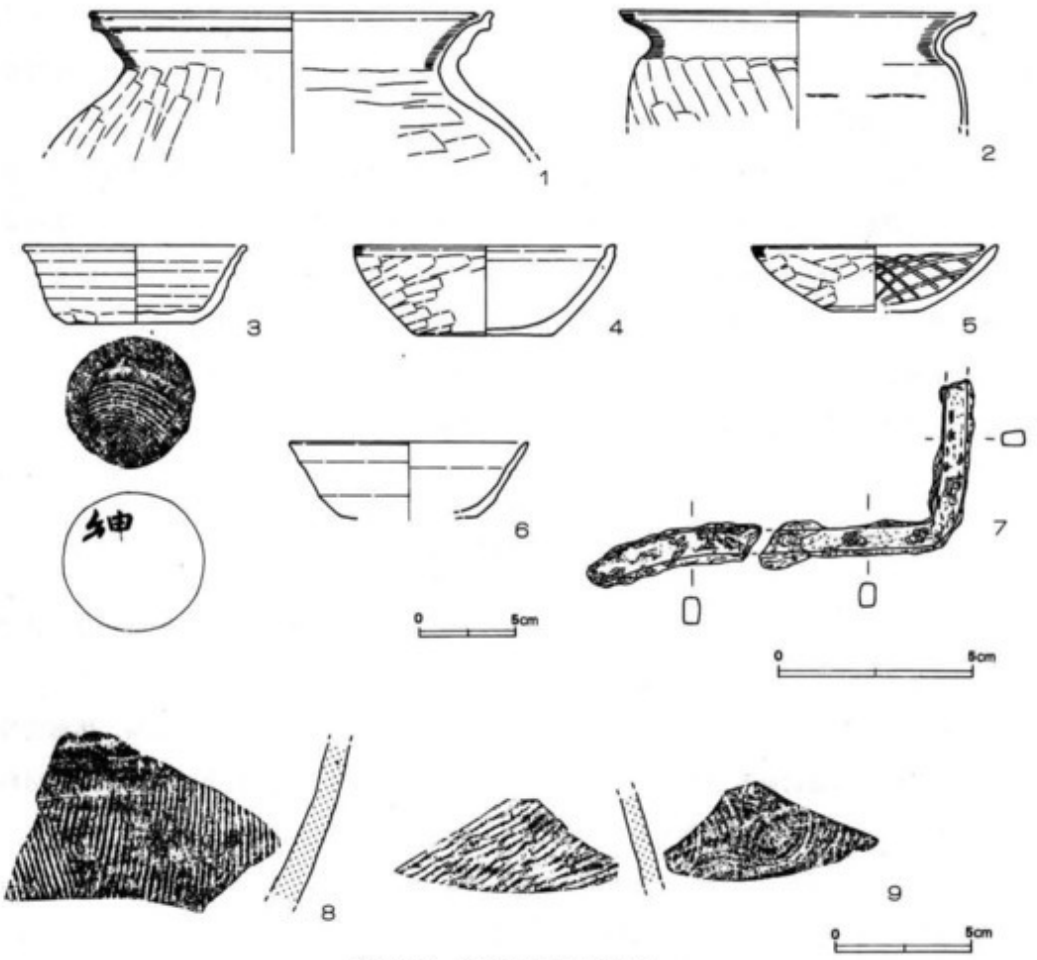
5．杯形土器（¼）。土師器。口径12.8cm（推）、器高3.3cm、底径4.4cm（推）。口縁部は、内外面とも横なでされる。外面体部は、ヘラ削り後ヘラなで（粗）され、底部はヘラ削りであ



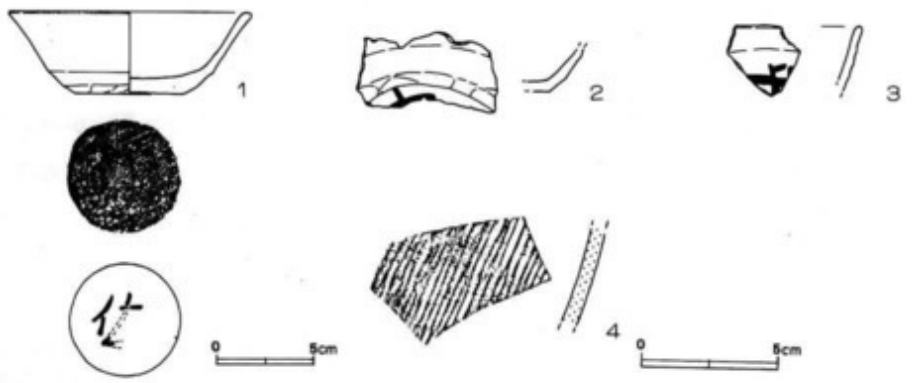
層序説明

Ⅰ．多量のローム粒を含む暗褐色土
Ⅱ．少量のローム粒及び少量のロームブロックを含む黒褐色土
Ⅲ．少量のローム粒及び少量のロームブロックを含む黒色土
Ⅳ．少量のローム粒及び微量の焼土粒を含む黒褐色土
Ⅴ．少量のローム粒及び少量の焼土粒を含む黒褐色土
Ⅵ．微量のローム粒を含む黒褐色土

第34図　溝状遺構及びピット群



第35図　溝状遺構出土遺物



第36図　遺構外出土遺物

る。内面は、なで後格子目状にヘラ磨きされている。胎土は、細砂粒含み、焼成はやや堅緻である。色調は内外とも赤褐色を呈する。(覆土中)

6．杯形土器（⅓)。土師器。口径12.2cm(推)、器高3.8cm、底径7cm(推)。体部は、内外面ロクロ調整される。底部の一部と体部下位は、手持ちヘラ削りされる。胎土は、細砂粒・白色粒子含み、焼成は堅緻である。色調は、内外とも淡橙褐色を呈する。(覆土中)

7．鉄製品。釘？。断面は、3×5mmの長方形である。(覆土中)

8．須恵の甕形土器片。タタキが施されている。(覆土中)

9．須恵の甕形土器片。タタキが施されている。(覆土中)

(5) 遺構外より検出された遺物 (第36図)

これらの遺物は、調査区の東側、第2号土壙の北側斜面部より検出された。遺構は、確認できなかった。

1．杯形土器（体部¼)。土師器。口径12.4cm(推)、底径5.6cm、器高4.2cm。体部内外はロクロ調整。底部は回転糸切り後周囲手持ちヘラ削り。墨書土器。胎土は細砂粒・雲母粒含み、焼成は堅緻。色調は内外とも淡白色を呈す。

2．杯形土器。土師器。墨書土器。体部ロクロ調整。底部手持ちヘラ削り。胎土は小砂粒・雲母粒含み、焼成は堅緻。色調は、内外とも橙褐色。

3．杯形土器。土師器。墨書土器。内外面ロクロ調整。胎土は小砂粒、焼成は堅緻。色調は、内外とも橙褐色。

4．須恵の甕形土器片。器面には、タタキが施されている。

5. ま と め

今回調査した小川台遺跡は、奈良・平安期の集落址であることが確認できた。だが、面積が狭小であったため、その全容は捉えられず、一端を窺い得たにすぎなかった。しかし、前述したように如何に僅少な遺構・遺物であろうとも、地域性を解するうえでは貴重な資料であろうし、また当時の社会構造の中でいかなる生活を営んでいたのだろうかと思えば、計り知れない歴史の1ページを垣間みたようでもあろう。

この小川台遺跡では、住居址9軒、掘立柱建物址2棟、土壙2基、溝状遺構1本が検出された。これらの遺構から検出された遺物、とくに土器は、そのほとんどが8世紀後半～9世紀中葉もしくは後半に比定できよう。まず、第1・5・6(?)号住居址と第3・7(?)・8号住居址に大別されることが考えられよう。第1号及び第5号住居址より検出された須恵の杯形土器と高台付杯は、その特徴から時間的に近似していると言え、また第8号住居址は第6号住居址を切って造られている。そして、第8号住居址出土土器と第7号住居址出土土器（覆土）が数点接合し、さらに両住居址に構築されたカマドの位置（方向）が、他のカマドと異なることも参考となりえよう。

調査区の中央寄りに位置する溝状遺構において、そこから検出された多くの土器(小破片)は第3号及び第4号住居址の土器片と似かよっており、廃棄的要素が強い溝状遺構との関連性が窺える。だが、この溝状遺構は、発掘した地点が最も深く、幅も3～4mあり、北西に伸びる部分は幅約1.5mと狭くなっており、この遺構がどのような施設なのか、いかなる目的を有しているのか、こういった問題の方がより重要性を感じる。また、第1号土壙にカマドの袖部と同様な粘土を敷いていたこと、東側斜面部より検出された遺物(第36図)、カマドを除去した第5号住居址の存在、これらの問題も課題として今後の研究に蓄積されたと言えよう。

なお、本書を作成するにあたり、光町公民館の方々には多大なご協力を得た。文末ながら、厚く感謝する次第である。

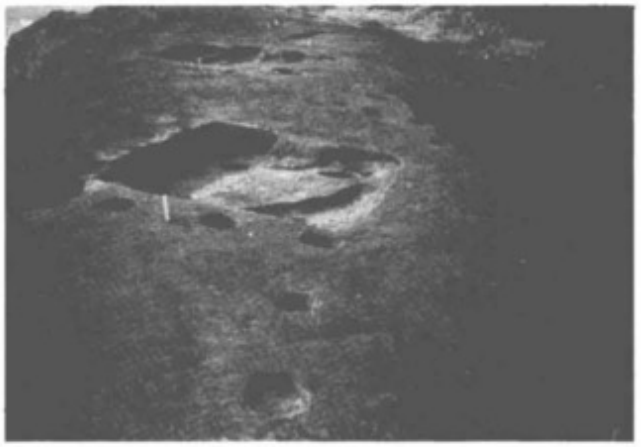
写　真　図　版

1．遺　跡　遠　景（南方から）

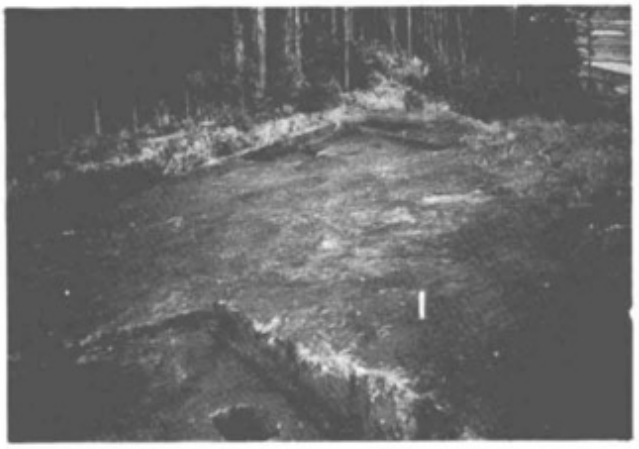
2．遺　　跡　遠　景（西方から）

図版2

1．遺跡全景（西方から）

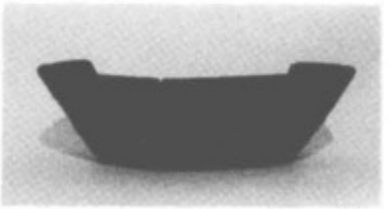


2．遺跡中央部（東方から）

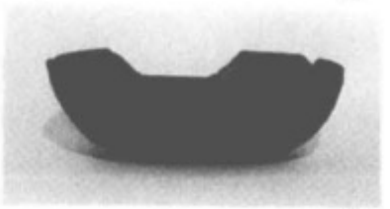


3．遺跡東端部（南方から）

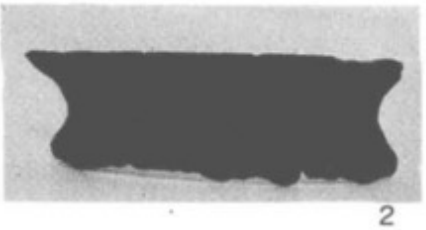
1．第1号住居址



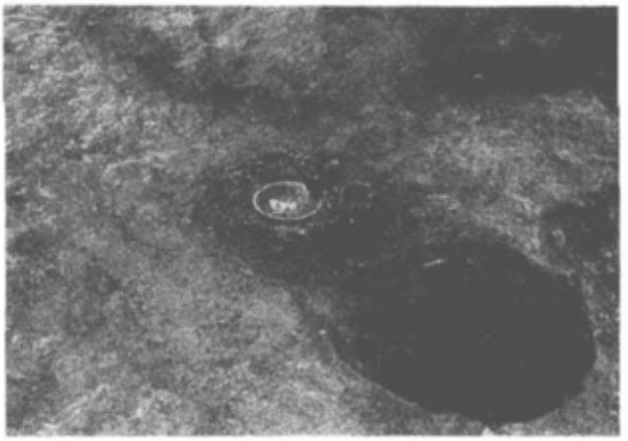
4



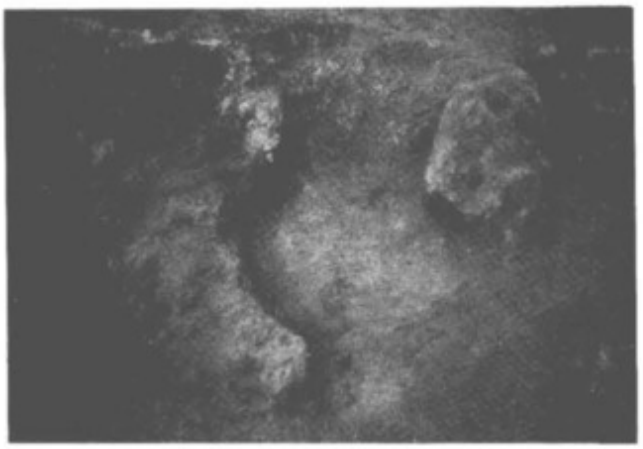
5



2



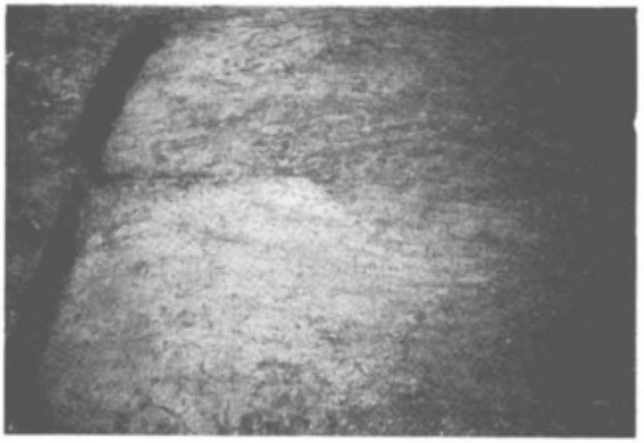
2．遺物出土状態



3．第1号住居址カマド

7

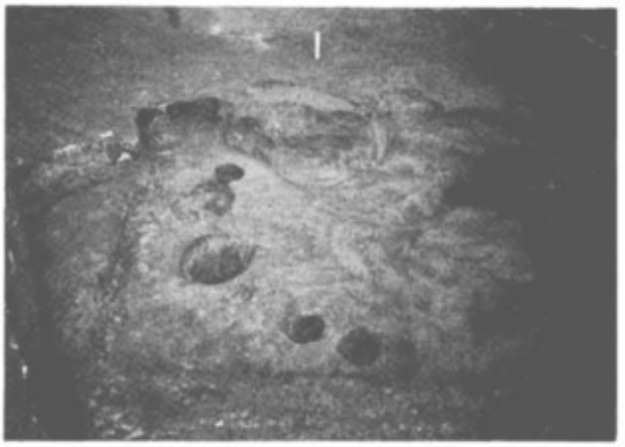
図版4



1．第2号住居址（上）
第9号住居址（下）

8

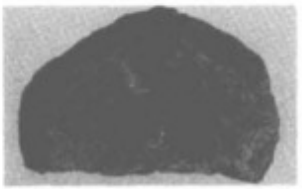
4



2．第3号住居址

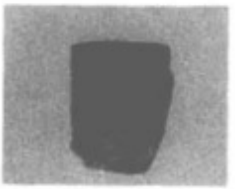
3．遺物出土状態

2



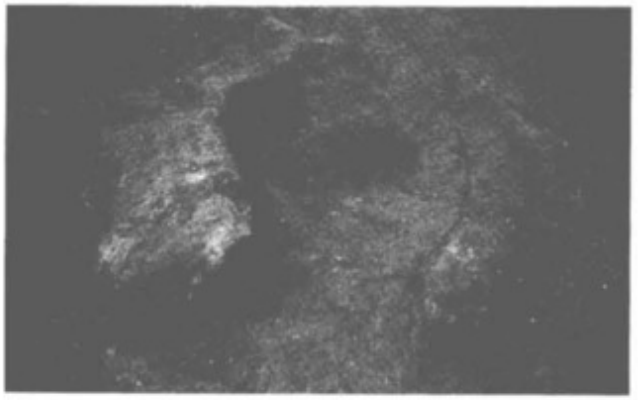
10

12



13

図版5



1．第3号住居址カマド

2．第4号住居址

図版6

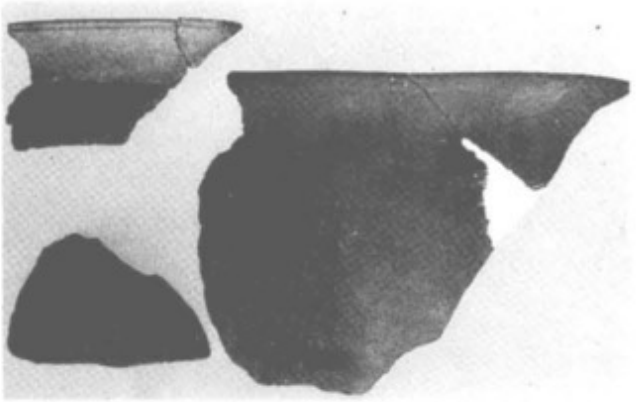
1．第5号住居址

5

6

3

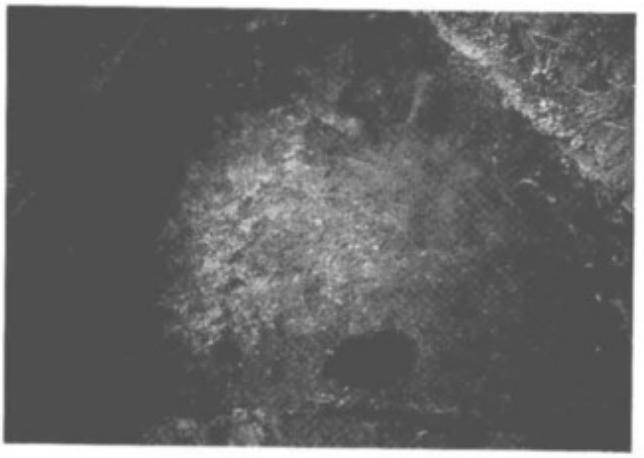
10



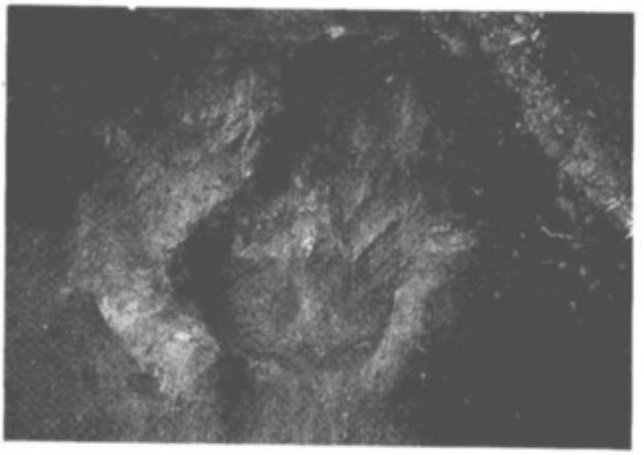
2

7

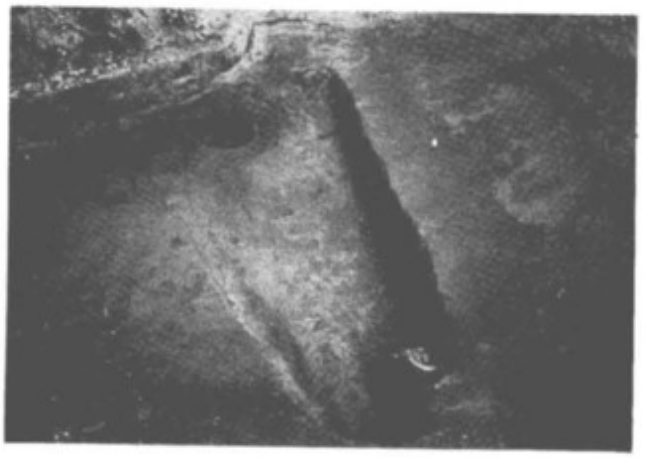
4



1．第6号住居址



2．第6号住居址カマド



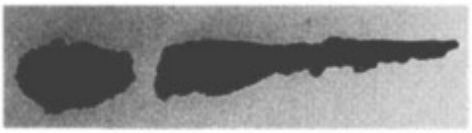
3．第7号住居址

図版8

1．第8号住居址

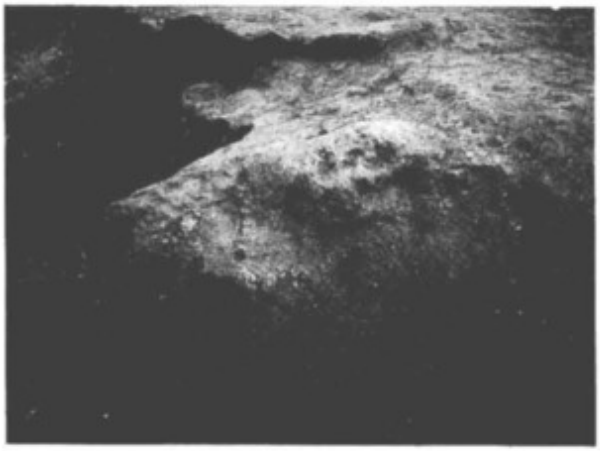
1

3



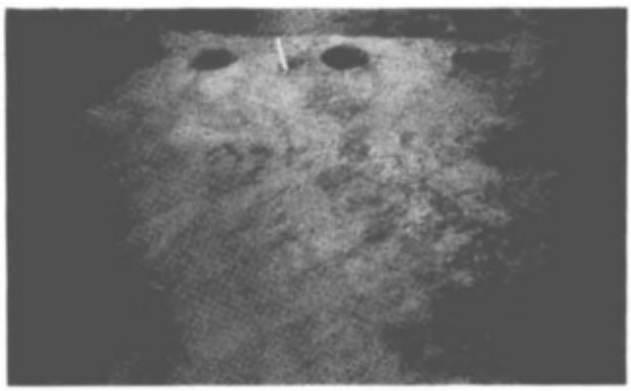
6

2

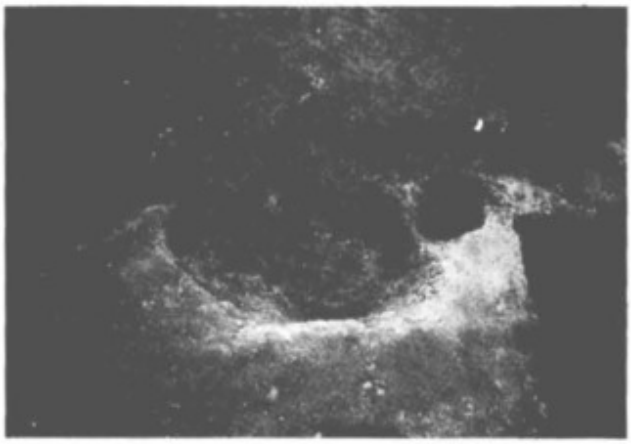


2．第8号住居址カマド

1．第1号掘立柱建物址

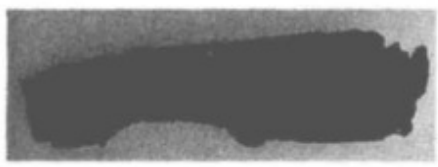


2．第2号掘立柱建物址



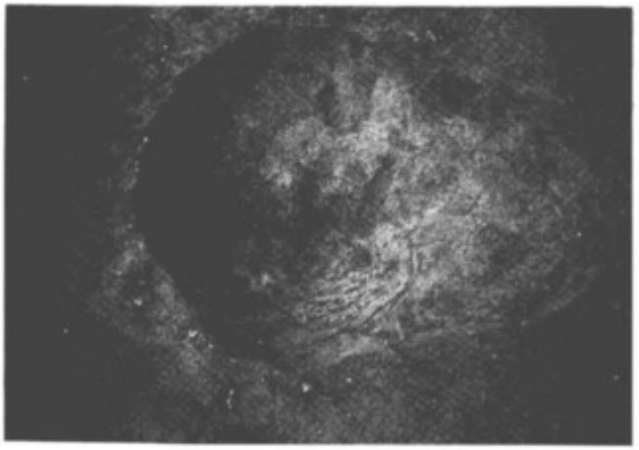
3．第1号土壙

2



1

図版10



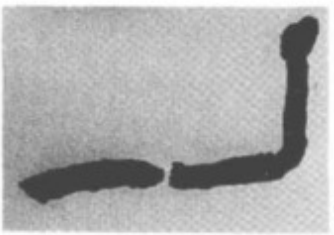
1．第２号土壙

2．溝状遺構とピット群

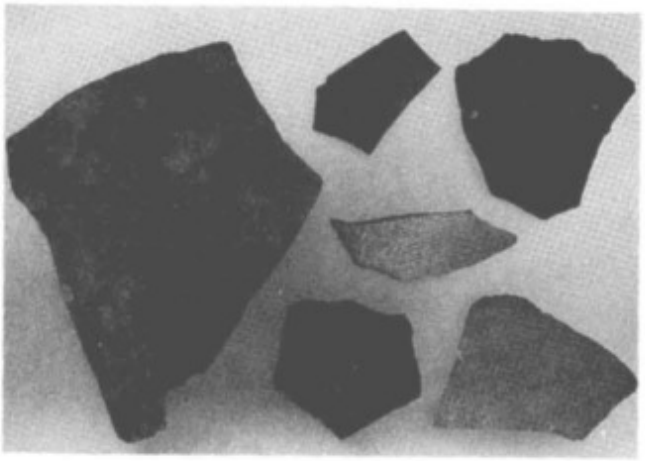
3

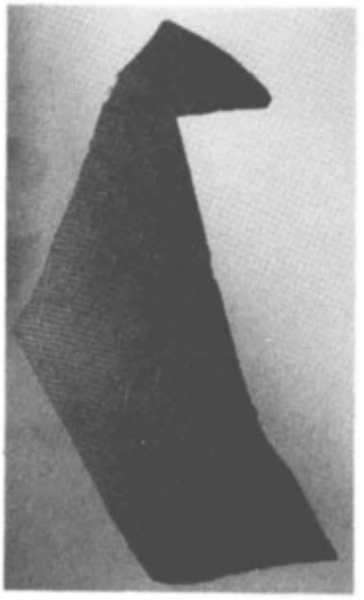
4

2

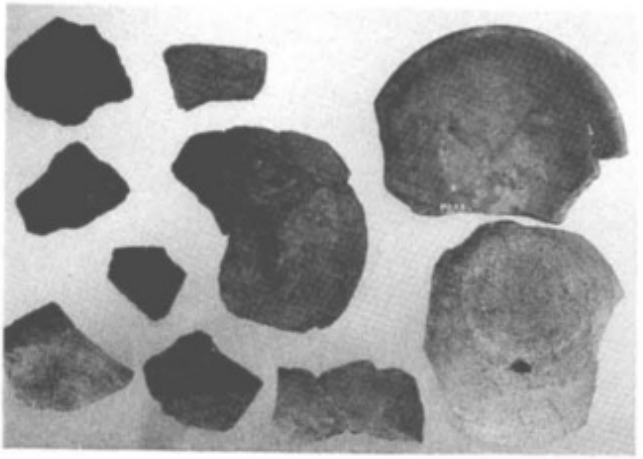


7





1．各須恵器片（叩き目）



2．各墨書土器

千葉県匝瑳郡光町
小川台遺跡発掘調査報告

昭和62年2月26日　印刷
昭和62年2月28日　発行

編集
発行　光町小川台遺跡調査会

印刷　ナカムラ印刷　☎0434-32-1005